第 21 回
教育システム改善のためのアンケート調査報告書

令和 8 年 9 月

有明工業高等専門学校
自己点検・評価委員会

目次

１．まえがき……1

２．アンケート結果およびその分析……2

２.１　令和 7 年度 準学士課程 5 年生卒業時アンケート……2

２.２　令和 7 年度 専攻科課程修了時アンケート……6

２.３　保護者アンケート…… 10

２.４　本校の準学士課程卒業生・専攻科課程修了生アンケート…… 13

２.５　就職先（企業等）アンケート…… 19

２.６　進学先（大学・大学院）アンケート…… 25

２.７　令和 8 年度 準学士課程入学生アンケート…… 30

２.８　令和 8 年度 準学士課程 4 年次編入学生アンケート…… 35

２.９　令和 8 年度 専攻科課程入学生アンケート…… 40

３．あとがき…… 43

別様　アンケート内容と集計結果

別様１　準学士課程卒業時（５年生）アンケート（令和 8 年 1 月実施）

別様２　専攻科課程修了時（２年生）アンケート（令和 8 年 1 月実施）

別様３　保護者アンケート（令和 8 年 2 月実施）

別様４　準学士課程既卒業生・専攻科課程既修了生アンケート（令和 8 年 3 月実施）

別様５　企業アンケート（令和 8 年 4 月実施）

別様６　大学・大学院アンケート（令和 8 年 4 月実施）

別様７　準学士課程入学生アンケート（令和 8 年 2 月実施）

別様８　準学士課程４年次編入学入学生アンケート（令和 8 年 4 月実施）

別様９　専攻科課程入学生アンケート（令和 8 年 4 月実施）

１．まえがき

本校では，教育理念，ディプロマ・ポリシーに基づいて設定された学習・教育到達目標を達成できるように教育プログラムを設計・作成し，日々の教育活動を展開しています。この教育プログラムに沿って教育を実践している本校の教育システム（教育体制）は，常時，点検・評価を行い，その結果を検討・分析し，継続的に改善を施し，向上させて行く必要があります。

自己点検・評価委員会（以下，本委員会）では，本校の教育システムの点検，分析そして改善・向上の一環として，6 種類のアンケート（一部隔年）を実施しています。卒業・修了直前の準学士課程 5 年生・専攻科課程 2 年生，新入生（準学士課程，準学士課程 4 年次編入学，専攻科課程），保護者，本校卒業生・修了生（OB・OG），本校卒業生の就職先・進学先（企業および大学・大学院），教職員へのアンケートです。アンケート結果の集計，分析，改善点に関しては「教育システム改善のためのアンケート調査報告書」（以下，調査報告書）として報告しています。過去 20 回あり，過去の調査報告書の内容に関しては本校ホームページに公開していますので，過去の年度に関してはそちらをご覧ください。

本調査報告書では，令和 7 年度準学士課程卒業生，専攻科課程修了生，令和 7 年度に本校に在籍する学生の保護者，本校の準学士課程既卒業生・専攻科課程既修了生（OB・OG），本校の準学士課程の卒業学生および専攻科課程の修了学生の就職先・進学先（企業および大学・大学院），令和 8 年度入学生（準学士課程，準学士課程 4 年次編入学，専攻科課程）のアンケート結果の集計，分析，改善点を報告します。

表 1　第 21 回のアンケート実施・分析状況一覧

分析回	調査年度	実施時期	アンケート対象	報告年月	備考
第 21 回	令和 7 年度	令和 8 年 1 月	R7 年度準学士課程卒業生	R8（2026）年 9 月	自己点検・評価委員会
		令和 8 年 1 月	R7 年度専攻科課程修了生		
		令和 8 年 2 月	保護者		
		令和 8 年 3 月	既卒業生・既修了生		
		令和 8 年 4 月	主な就職先企業		
		令和 8 年 4 月	主な進学先		
		令和 8 年 2 月	R8 年度準学士課程入学生		
		令和 8 年 4 月	R8 年度 4 年次編入生		
		令和 8 年 4 月	R8 年度専攻科課程入学生		

２．アンケート結果およびその分析

２.１　令和７年度の５年生卒業時アンケート

平成 28 年 4 月に改組が行われ 5 学科制から，創造工学科 1 学科 6 コース制となった。令和 6 年度の卒業生が創造工学科の 5 期生となり，本アンケートも 1 期生が卒業した令和 2 年度よりアンケートの内容を変更している。本アンケートは 1 月に電子メールで学生にアンケートの依頼を行い，担任の協力を得ながら Google Forms を利用して実施している。過去 3 年間のアンケートの実施状況を表 2−1−1 に示す。表 2−1−1 の通り，令和 7 年度の回答率は 91 %であったことから，回答方法に問題はないと思われるが，100%にするための声掛け等が肝要である。

表 2−1−1　過去 3 年間の 5 年生卒業時アンケートの実施状況（参考）

	実施時期	対象者数（名）	回答者数（名）	回答率（%）
令和 5（2023）年度	令和 6 年 1 月	210	256	122
令和 6（2024）年度	令和 7 年 2 月	184	152	83
令和 7（2025）年度	令和 8 年 2 月	197	179	91

教育システムに関する分析として，令和 7 年度と令和 6 年度，令和 5 年度とを比較することとした。本年度からは，全コースの割合で分析とし，各コースで平均と大きく異なる場合にコメントを付すこととした。

（参考）昨年度までのコース別集計での評価記述方法
以下の表において，各年度で全コースの平均値から 10 %以上低い場合は数値を網掛けしその右横に⊖，10 %以上高い場合は数値を網掛けしその右横に⊕を付し，令和 6 年度のパーセンテージが令和 5 年度から 10 ポイント以上上昇した場合は数値右横に↑，10 %以上下降した場合は数値右横に↓を付した。なお，C および L コースはその他のコースに比べ学生定員数が半分であり，一人のアンケートの有無でパーセンテージが他のコースに比べ変動が大きいことに留意する必要がある。

Ａ：回答者自身に関する設問

【(設問 1）所属コース】
令和 6 年度において，5 年生は 4 月時点で 218 名が在籍しており，184 名が卒業した。一方，令和 7 年度において，教務係による統計では，令和 3 年 4 月入学時の学生数は 214 名（留年生含む），令和 5 年 4 月に 3 年次に留学生 2 名（C1 名，I1 名），令和 6 年 4 月に 4 年次編入学生 5 名（E1 名，C1 名，I2 名，A1 名）が加わっている。最終的に，令和 7 年度の 5 年次学生の基本的全学生数（累計の入学者数）は 221 名であり，その内の 89%（197 名）の学生が卒業していることになる。令和 6 年度の 84 %より上昇している。

【(設問 2）卒業後の進路】
アンケート回答者の 73%（130 名）が就職で，令和 6 年度（70 %）とほぼ同じであった。進学は 28%（49 名）であり，令和 6 年度（29%）とほぼ同じであった。そのうち大学 3 年次編入学に 17%（30 名），専攻科課程に 11%（19 名）の学生が進学しており，令和 6 年度の 16%，13%と比較してもほぼ同程度である。

Ｂ：教育全般の総括の評価に関する設問

【(設問 3～12）一般教育，専門教育，教育設備・学習環境，ICT 環境・活用，図書館資料とその活用，期待していた実力の修得，教育研究の成果に関する満足度について】
表 2−1−2 に有明高専における教育全般の満足度に関するアンケートの結果を示す。回答は「満足している」，「おおむね満足している」，「やや不満である」，「不満である」の 4 つの選択式で，表中のパーセンテージは「満足している」と「おおむね満足している」の合計である。
「一般教育」の項目において，令和 6 年度と同様，令和 7 年度も全コースの平均値で 98%と満足度が高かった。
「専門教育」の項目において，令和 6 年度と同様，令和 7 年度も全コースの平均値で 96%と満足度が高かった。
「教育設備・学習環境」については全コースの平均値で 94 %であり，満足度が高かった。
「ICT 環境・活用」」については全コースの平均値で 94 %であり，満足度が高かった。なお，令和 5 年度から，「ICT 環境はどうでしたか」「ICT の活用はどうでした」と内容を 2 つに分けてアンケートを実施しており，表 2−1−2 の値はこの 2 つの合計である。別々にとったアンケート結果を表 2−1−3 に示す。

「図書館資料・活用」の項目については全コースの平均値で98%であり，満足度が高かった。なお，令和5年度から，「図書，学術雑誌，電子ジャーナルその他の教育上必要な資料はどうでしたか」「図書館の活用はどうでした」と内容を2つに分けてアンケートを実施しており，表2−1−2の値はこの2つの合計である。別々にとったアンケート結果を表2−1−3に示す。
「期待した実力修得（学力・資質&能力)」の項目では，全コースの平均値で97 %（学力）・99%（資質&能力）であり，平均で98%と満足度が高かった。「教育研究成果」については全コースの平均値で98%であり，満足度が高かった。

表 2−1−2　教育における満足度調査のアンケート結果（%）

	一般教育			専門教育			教育設備・学習環境			ICT 環境・活用		
	R7	R6	R5	R7	R6	R5	R7	R6	R5	R7	R6	R5
平均	98	99	96	96	97	96	94	94	96	94	96	93

	図書館資料・活用			期待した実力修得			教育研究成果		
	R7	R6	R5	R7	R6	R5	R7	R6	R5
平均	98	99	96	98	98	98	98	97	95

表 2−1−3　教育における満足度調査のアンケート結果（ICT・図書）（%）

	ICT 環境			ICT の活用			教育上必要な資料			図書館の活用		
	R7	R6	R5	R7	R6	R5	R7	R6	R5	R7	R6	R5
平均	94	95	96	94	96	93	96	99	94	99	99	96

C：学習・教育到達目標について

【(設問 13～21)】

表 2−1−4，2−1−5，2−1−6 に有明高専における学習・教育到達目標が身に付いたか，達成度に関するアンケートの結果を示す。選択肢は「身に付いたと思う」,「おおむね身に付いたと思う」,「少し身に付いたと思う」,「余り身に付かなかったと思う」の 4 つであり，表中のパーセンテージは「身に付いたと思う」と「おおむね身に付いたと思う」の合計である。

全ての学習・教育到達目標において，全コースの平均値で 92%以上であり，全ての学習・教育到達目標は「おおむね身に付いた」と考えられる。

A「豊かな教養と国際性」については，A-1 と A-2 では，全コースの平均値で 99%となっており非常に良い状況である。A-3「コミュニケーション能力」では 92%であるものの例年同様の良好な状態であると言える。

B「専門知識と学際性」については，全ての学習・教育到達目標で全コースの平均値で 97 %で非常に良い状況である。

C「創造性とデザイン能力」については，C-1 と C2 共に，全コース平均値で 97 %を越えており非常に良い状況である。

学習・教育到達目標は，全ての基本である。高いパーセンテージを持続し，今後の学校運営の指標として活かしてほしい。

表 2−1−4　学習・教育到達目標（A：豊かな教養と国際性）が身に付いたかのアンケート結果（%）

	A-1			A-2			A-3		
	R7	R6	R5	R7	R6	R5	R7	R6	R5
平均	100	100	98	100	100	99	95	95	93

表 2−1−5　学習・教育到達目標（B：専門知識と学際性）が身に付いたかのアンケート結果（%）

	B-1			B-2			B-3			B-4		
	R7	R6	R5	R7	R6	R5	R7	R6	R5	R7	R6	R5
平均	99	99	99	98	98	98	98	99	98	99	99	98

表 2−1−6　学習・教育到達目標（C：創造性とデザイン能力）が身に付いたかのアンケート結果（%）

	C-1			C-2		
	R7	R6	R5	R7	R6	R5
平均	99	99	99	98	98	98

D：その他

【(設問 22) 教育理念に関する設問】

表 2−1−7 に有明高専における教育理念に関するアンケートの結果を示す。本校では,「求める人材像」である「教育理念」を定めている。令和 5 年度より,「教育理念」に関する認知度のアンケートを実施した。設問は，本校の教育理念「幅広い工学基礎と豊かな教養を基盤に，創造性，多様性，学際性，国際性に富む実践的な高度技術者の育成を目指す」を「知っていた」,「おおむね知っていた」,「少し知っていた」,「知らなかった」の 4 つであり，表中のパーセンテージは「知っていた」と「おおむね知っていた」の合計である。令和 5 年度から微増しながら 90%に向かいつつある。周知徹底を図るとともに，今後の対応を検討する必要がある。

表 2−1−7　教育理念に関するアンケート結果

	知っていた		
	R7	R6	R5
平均	89	89	84

【(設問 23，24) シラバスに関する設問】

シラバスの利用に関するアンケート結果を表 2−1−8 に示す。「シラバス利用」のアンケートの選択肢は「利用した」,「それなりに利用した」,「あまり利用しなかった」,「利用しなかった」の 4 つであり，表中のパーセンテージは「利用した」と「それなりに利用した」の合計である。また,「シラバスの利用状況をもとにした授業改善」のアンケートの選択肢は「見られた」,「それなりに見られた」,「あまり見られなかった」,「見られなかった」の 4 つであり，表中のパーセンテージは「見られた」と「それなりに見られた」の合計である。

表 2−1−8　シラバスに関するアンケート結果（%）

	シラバス利用			シラバスと授業改善		
	R7	R6	R5	R7	R6	R5
平均	95	95	91	91	91	91

シラバスの利用に関して，全コースの平均値で 90 %以上であり，本校ではシラバスの授業計画に基づき，授業が実施され，また改善も行われていることが確認できる。各コースにおけるシラバスの活用や授業改善は，令和 6 年度までと比較して，多少の増減はあるものの，おおむね改善されているが，C については母数は少ないが，71%と低く注意が必要である。

【(設問 25，26) TOEIC 関連の設問】

TOEIC 関連のアンケート結果を表 2−1−9 に示す。アンケートの選択肢は「役に立った」,「おおむね役に立った」,「あまり役に立たなかった」,「役に立たなかった」の 4 つであり，表中のパーセンテージは,「役に立った」と「おおむね役に立った」の合計である。「TOEIC 関連の授業の役立ち」の設問に関して，全コースの平均値で 74%と令和 6 年度と同程度で，およそ 1/4 が役立たなかったと回答しており課題がある。。「TOEIC 一斉試験が役に立ったか」の設問に関して，全コースの平均値で 87%であり，受験に対する高いモチベーションは維持されている。TOEIC は国際社会で活躍する人材としての素養となり得るため，平常授業と試験の関係性や結び付きを丁寧に示し「授業の役立ち」と連動するように改善することが重要である。

表 2−1−9　TOEIC に関するアンケート結果（%）

	授業の役立ち			一斉試験について		
	R7	R6	R5	R7	R6	R5
平均	74	74	80	87	88	84

【(設問 27〜31) レポートのフィードバック，教員の授業時間外の学習指導，授業改善アンケートとその授業改善への反映，学修単位の時間外学修の評価，進路支援について】

「レポートのフィードバック」,「教員の授業時間外の学習指導」,「授業改善アンケートと授業改善」,「学修単位の時間外学修の評価」,「進路支援」に関するアンケート結果を表 2−1−10 に示す。各表のパーセンテージは 4 択のうち上位 2 つ，例えば「レポートのフィードバック」では「適正」と「おおむね適正」の合計である。

「レポートのフィードバック」に関しては，90%以上の良い傾向が見える。「授業時間外の学習指導」に関しては，安定的に全コース平均値で 99 %と良好である。「授業改善アンケートとその授業改善への反映」に関して，全コース平均値で微増減はあるものの 90 %と安定している。「学修単位の授業時間外学修の評価」に

関しては，全コースの平均値は 99 %であり，良好な状況であった。授業時間外の学修の重要性が認知されてきている証であると考えられる。「進路支援」に関しては，全コース平均値は 98%であり，高い満足度を得ている。

表 2−1−10 レポートのフィードバック，授業時間外学習指導，授業改善アンケートと授業改善，進路支援に関するアンケート結果（%）

	レポートのフィードバック			授業時間外学習指導			授業改善アンケート		
	R7	R6	R5	R7	R6	R5	R7	R6	R5
平均	93	89	91	99	99	98	89	92	91

	学修単位の評価			進路支援		
	R7	R6	R5	R7	R6	R5
平均	99	97	95	98	96	97

【(設問 32，33）成績評価・単位認定基準，卒業要件の認知度について】

「成績評価・単位認定の基準」と「卒業要件」に関する認知度のアンケート結果を表 2−1−11 に示す。アンケートの選択肢は「知っていた」,「おおむね知っていた」,「少し知っていた」,「知らなかった」の 4 つであり，表中のパーセンテージは「知っていた」と「おおむね知っていた」の合計である。

「成績評価・単位認定の基準」の認知度に関して，全コースの平均値で 95 %であり，良好であった。

「卒業要件の認知度」に関して，全コース平均値で 98%であり，周知徹底が図られていることが分かる。

表 2−1−11 成績評価・単位認定に関する基準，卒業要件の認知度に関するアンケート結果（%）

	成績評価・単位認定基準			卒業要件		
	R7	R6	R5	R7	R6	R5
平均	95	98	97	98	97	96

【(設問 34，35）数理・データサイエンス・ＡＩ教育プログラムの認知度・達成度について】

本校が令和 4 年 8 月に文部科学省等が定めた制度「数理・データサイエンス・ＡＩ教育プログラム（リテラシーレベル)」に認定されたことに伴い，令和 4 年度のアンケートからその認知度と達成度に関する設問を追加した。アンケート結果を表 2−1−12 に示す。アンケートの選択肢はいずれも 4 つであり，表中のパーセンテージは認知度では「知っていた」と「おおむね知っていた」の合計，達成度では「よく理解できた」と「おおむね理解できた」の合計である。

「数理・データサイエンス・ＡＩ教育プログラムの認知度」に関しては，全コースの平均値で 68%と比較的低く，周知が必要である。一方で,「数理・データサイエンス・ＡＩ教育プログラムの該当科目に対する達成度」に関して，全コース平均値で 92 %であり，プログラム認知度との乖離に関して，今後の状況を注視する必要がある。認知度・達成度は全コースの平均値で増加傾向にあり，プログラムを継続すること,「数理・データサイエンス・ＡＩ教育プログラム」を修了した卒業生の活躍により，状況の改善が期待される。

表 2−1−12 数理・データサイエンス・ＡＩ教育プログラムの認知度・達成度に関するアンケート結果（%）

	プログラム認知度			プログラム達成度		
	R7	R6	R5	R7	R6	R5
平均	68	68	66	91	92	88

【(設問 36）意見・要望】

自由意見を回答していただいた卒業生には感謝申し上げる。ここで個別に取り上げることはしないが，是非ともアンケート結果を参照いただき，建設的な意見・要望については，関係部署は今後の改善に活かしてもらいたい。

２.２　令和７年度の専攻科課程修了時アンケート

専攻科課程修了時の専攻科課程生に対するアンケートは平成14年度から実施している。過去5年間の実施状況を表2−2−1に示す。本アンケートは2月に専攻科生宛に電子メールでアンケート依頼を行い，Google Forms を利用して実施した。

令和 6 年度の専攻科課程修了時アンケートに関して，取得はしたものの，その後の担当教職員等の異動やアカウントの削除の影響で分析が困難となったため，教育システムに関する分析として，令和 7 年度と令和 5 年度，令和 4 年度を比較することとした。

本年度からは，アンケート回収ソフトの関係上，従前の専攻別の集計ではなく，全専攻の%で分析を進める。

（参考）昨年度までの専攻別集計での評価記述方法）

教育システムに関する分析において，令和 5 年度に大きな質問項目の見直しを行ったため，令和 6 年度と令和 5 年度，場合によってはそれらに令和 4 年度の結果を含めて比較等することとした。専攻科は母数が少ないため，1 人の意見の違いがパーセンテージの上下に大きく影響するので，そのことを留意しておく必要がある。本，全専攻のパーセンテージにおいて，令和 6 年度のパーセンテージが令和 5 年度から 10 ポイント以上上昇した場合は数値右横に↑，10 %以上下降した場合は数値右横に↓を付した。

表 2−2−1　過去 5 年間の専攻科課程修了時アンケートの実施状況（参考）

	実施時期	対象者数（名）	回答者数（名）	回答率（%）
令和 4 (2022)年度	令和 5 年 1 月	29	29	100
令和 5 (2023)年度	令和 6 年 1 月	32	36	113
令和 6 (2023)年度	令和 7 年 1 月	27		
令和 7 (2024)年度	令和 8 年 1 月	26	25	96

本アンケートの回答率は令和 2 年度に 11 %と極端に悪かったが，令和 4 年度は 100 %の回答率となり，令和 5 年度は重複回答があったため，100 %を超えてしまっていたが，複数回答制限をつけることにより現在は改善している。

Ａ：回答者自身に関する設問

【(設問 1）所属コース】

令和 6 年度の入学時は 26 名で，令和 7 年度での修了予定者は 26 名で，その内訳は，E 5 名，M 5 名，I 6 名，C 5 名，A5 名である。

「生産情報システム工学専攻・電気系」については「E」と表記し，「同専攻・機械系」および「同専攻・電子情報系」はそれぞれ「M」,「I」と，また応用物質工学専攻，建築学専攻はそれぞれ「C」,「A」と表記する。

【(設問 2）修了後の進路】

令和 7 年度の修了予定者の進路は，大学院進学予定者が 12 名，就職予定者が 14 名である。令和 6 年度の修了予定者の進路は大学院進学予定者が 12 名，就職予定者が 15 名，令和 5 年度の修了予定者の進路は大学院進学予定者が 11 名，就職予定者が 21 名，令和 4 年度のそれは大学院進学予定者が 3 名，就職予定者が 25 名である。大学院への進学者占める割合が，11%，26%，44%，46%となっており，進学する学生が上昇する傾向が見てとれた。

Ｂ：教育全般の評価に関する設問

【(設問 3〜14）一般教育，専門教育，教育設備・研究環境，ICT 環境，図書館資料とその活用，期待していた実力の修得，教育研究の成果に関する満足度について】

表 2−2−2 に有明高専における教育全般の満足度に関するアンケートの結果を示す。回答は「満足している」,「おおむね満足している」,「やや不満である」,「不満である」の 4 つの選択式で，表中のパーセンテージは「満足している」と「おおむね満足している」の合計である。

表 2−2−3 に有明高専における教育全般の学力，資質・能力について，成果，達成度に関するアンケートの結果を示す。回答は「良かった」,「おおむね良かった」,「あまり良くなかった」,「良くなかった」の 4 つの選択式で，表中のパーセンテージは「良かった」と「おおむね良かった」の合計である。全ての項目におい

て非常に高い割合となっており，満足度が高いことがわかる。

唯一，ICT 環境に関しての満足度が 97%から 84%と若干低下していることが気になるため，学生からの状況の聞き取りや今後の経過観察が重要となる。

なお，令和 5 年度よりアンケート内容の見直しがあったため，一部の項目が令和 4 年度にはないことから表中では斜線で表している。

表 2−2−2　教育における満足度調査のアンケート結果（%）

	一般教育（文系）			一般教育（理系）			専門教育（座学）			研究環境		
	R7	R5	R4*	R7	R5	R4*	R7	R5	R4*	R7	R5	R4*
平均	100	100	97	100	100	97	100	100	93	100	100	93

	ICT 環境			教育上必要な資料			期待していた実力			教育・研究成果		
	R7	R5	R4	R7	R5	R4	R7	R5	R4	R7	R5	R4
平均	84	97		92	97		96	100	93	100	97	97

表 2−2−3　教育における学力，資質・能力についての成果，達成度調査のアンケート結果（%）

	一般教育（文系）			一般教育（理系）			専門教育（座学）			専門教育（研究等）		
	R7	R5	R4	R7	R5	R4	R7	R5	R4	R7	R5	R4
平均	100	100		96	100		100	100		100	100	

C：学習・教育到達目標に関する設問

【(設問 15～25）学習・教育到達目標に関する重要度，満足度，学力・資質・能力について】

専攻科課程の学習・教育到達目標として，以下の 7 項目が掲げてある。

A1 多面的考察力：物事を多面的に考察できること。
A2 高い倫理観：技術者としての倫理観を確立できること。
A3 コミュニケーション能力：日本語及び外国語によるコミュニケーションを適切にできること。
B1 工学の基礎知識：工学の基礎知識を専門に応用できるまで理解できること。
B2 工学の専門知識：工学の専門知識を深く理解できること。
B3 実践力：実験・実習等を確実に実践できること。
B4 工学の学際的知識：工学の学際的知識を専門知識に活用できる程度に習得すること。
C1 課題探究力：現状を進展させるための課題の探求・理解が自らできること。
C2 課題解決力：様々な問題に対処できるデザイン能力を習得すること。

図 2−2−4，表 2−2−5 に，専攻科課程の学習・教育到達目標の重要度，満足度，学力・資質・能力に関するアンケート結果を示す。

専攻科課程修了生全体（黒）の回答結果から，60 %を越えているものは，重要度では「A1（69 %）」「C1（61 %）」で，B1，B2，B3 が 50%を超えている。満足度では 50%を越えているものがなく，最も高いものでも「B2（42 %）」で，50%を越える項目が複数あった R5 年度に比べいずれも低くなっていた。専攻科生は，多面的考察力，課題探究力および自らの専門分野の能力を重要視している一方，満足度が低いことがわかる。，学力・資質・能力に関しては，修了に必要な科目を修得していることから，良かった・おおむね良かったを合わせると全コース 100%となっており，身につけるべき力をつけているということを自認できていることがわかる。

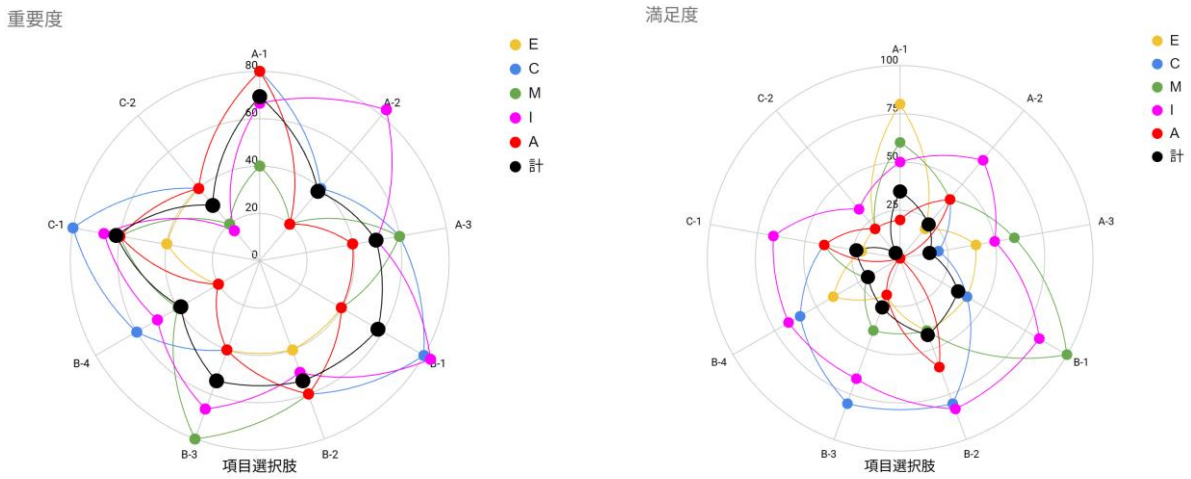


図 2−2−4　学習・教育到達目標に関する重要度（左）および満足度（右）調査のアンケート結果
（重要度/満足度が高いと思われる項目・複数回答可）

表 2−2−5　学習・教育到達目標に関する学力・資質・能力のアンケート結果（%）

	A1			A2			A3		
	R7	R5	R4	R7	R5	R4	R7	R5	R4
平均	100	97		100	100		100	100	

	B1			B2			B3			B4		
	R7	R5	R4	R7	R5	R4	R7	R5	R4	R7	R5	R4
平均	100	100		100	100		100	100		100	100	

	C1			C2		
	R7	R5	R4	R7	R5	R4
平均	100	97		100	14	

D：その他

【(設問 26〜40）その他】

表 2−2−6，表 2−2−7，表 2−2−8 に，発表会・少人数教育・TOEIC，シラバス・時間外・進路支援・教育理念，修了要件・評価基準・ICT 活用・図書館活用に関するアンケート結果を示す。表 2-2-6 では満足度は高いものの TOEIC に関しての支援や自身の積極的な取組に関して低い値となっている。しかし，徐々に数値も上がっており，継続して支援強化を図る必要がる。

時間外自学自習が 88%と改善しており，シラバス活用を基本として，学修科目の意味を理解し，時間外自学自習が必要であるという認識をしている学生が増加したことは喜ばしい。

ICT の普及により，図書館等の活用が若干低下している傾向は見えるが，今後の社会情勢も見ながら，時代に会った教育環境の提供と活用方法の提示を継続して検討する必要があると考える。

表 2−2−6　発表会・少人数教育・TOEIC に関するアンケート結果（%）

	発表会満足度			学外発表有益性			少人数教育			TOEIC 支援			TOEIC 取組		
	R7	R5	R4	R7	R5	R4	R7	R5	R4	R7	R5	R4	R7	R5	R4
平均	100	100	97	96	100	97	100	100	100	80	81	66	72	53	

表 2−2−7　シラバス・時間外・進路支援・教育理念に関するアンケート結果（%）

	シラバス活用			時間外自学自習			時間外対応			進路支援			教育理念(人財像)		
	R7	R5	R4	R7	R5	R4	R7	R5	R4	R7	R5	R4	R7	R5	R4
平均	88	97	90	88	69	66	92	100	97	100	100	97	100	94	

表 2−2−8　修了要件・評価基準・ICT 活用・図書館活用に関するアンケート結果（%）

	修了要件の確認			修了要件			成績評価単位認定			ICT 活用			図書等の活用		
	R7	R5	R4	R7	R5	R4	R7	R5	R4	R7	R5	R4	R7	R5	R4
平均	96	100	97	96	100	97	96	100	97	96	94	86	84	86	86

【今後の課題】

専攻科に関しては，学習・教育到達目標の理解も高く，一般・専門教育の満足度も高いことから，継続的で安定的な教育環境の提供を心がける必要がある。専攻科のアンケートは，少人数であるため，学年の雰囲気などにも大きく影響されるため一喜一憂した対応は気をつける必要があるが，TOEIC に関する学生の意識が高まってきていることは授業担当教員として接していても感じることが多い。国際的な力を身に付けること，そして，倫理感を持った技術者を目指すことをしっかりと着実に教育する必要がある。

２.３　保護者アンケート

保護者に対するアンケートは平成 23 年度までは準学士課程 2 年生の保護者に対して毎年実施されていたが，平成 24 年度からは新入生保護者アンケートとして実施され，現在の準学士課程 1 年生の新入生アンケート（主に受験動機と AP 認知度のアンケート）へと引き継がれている。今年度から，新たに有明高専の学生保護者に対して，学生と保護者のコミュニケーション，有明高専の教育理念等の認識度調査を含めた学校運営に関する意見を調査する保護者アンケートを実施した。本アンケートは 2 月の成績送付時に案内文を同封し，メール（締切 1 週間前にリマインドメール）を出し，3 月 31 日までで google form を用いて実施している。アンケートを実施した令和 8 年 3 月時点における本校学生の保護者はのべ 1075 名で，回答者数は 768 名で，回答率 71 %であった。他のアンケートと同様の方式であることから，実施方法としては問題ないと考えるが，周知方法，アンケート実施時期には改善の余地がある。

【(設問 1）学年について】

アンケートに答えていただいた保護者の学生の学年を表 2-3-1 に示す。1，2 年生では 80 %程度以上で回答率が高く，その後，学年を追うごとに回答率が下がる傾向が見て取れた。専攻科では回答が非常に悪くなっていることがわかる。

表 2-3-1　回答いただいた保護者の学生の学年（%）

学年(在籍人数)	R7
1 年生(208)	79
2 年生(204)	87
3 年生(213)	70
4 年生(199)	69
5 年生(202)	65
専攻科 1 年生(23)	22
専攻科 2 年生(26)	8

【(設問 2）居住地について】

アンケートに答えていただいた学生の居住地を表 2-3-2 に示す。寮生は全学生数の 23 %であったことから，今回のアンケートでは 25 %であったことから，統計として問題のない状況と考えられる。

表 2-3-2　学生の居住地（%）

学年(在籍人数)	R7
寮生(247)	25
保護者宅	70
保護者と別居	5
その他	0

【(設問 3）学生とのコミュニケーションについて】

保護者と学生との間のコミュニケーションの状況を表 2-3-3 に示す。保護者アンケートは，本年度から実施であるため，得られた値（パーセンテージ）は調査初期値として意味合いが強いが，「十分に取れている」，「とれている」で 90 %あることは保護者－学生間のコミュニケーションの初期値としては良好な結果と考えられる。なお，「あまりとれていない」，「とれていない」に（「とれていない」は 0%であるが回答数はゼロではない）回答がある（2%）ことから，注視が必要である。本校には学生相談室もあり，学生相談室を活用していただけるとありがたい。

表 2-3-3　保護者と学生との間のコミュニケーション（%）

保護者と学生との間のコミュニケーションの状況	R7
十分に取れている	36
とれている	54
どちらともいえない	8
あまりとれていない	2
とれていない	0

【(設問 4) 有明高専の教育活動について】

有明高専の教育活動について結果を表 2-3-4 に示す。保護者アンケートは，本年度から実施であるため，得られた値（パーセンテージ）は調査初期値として意味合いが強いが，「大変満足」，「満足」で 84%であったことは有明高専の教育活動について，保護者から一定の理解が得られていると考えられる。しかし，「不満」，「大変不満」が 2%あることから，これらを軽視することはできない。(設問 8) に記述されていることと考えられるので，運営会議で内容を確認していただきたい。

表 2-3-4　有明高専の教育活動の満足度（%）

教育活動の満足度	R7
大変満足	25
満足	59
どちらともいえない	15
不満	1
大変不満	1

【(設問 5) 有明高専の教育活動の満足しているポイントについて】

有明高専の教育活動について「大変満足」，「満足」と解答していただいた方に具体的な内容の結果を表 2-3-5 に示す。複数回答の回答であることから，「大変満足」，「満足」と解答していただいた方に対する各回答の割合を示している。80 %の方が教務関係に満足をいただいている一方で学生指導に関しては 45 %という状況であった。学生指導関係については今後の動向を注視していく必要がある。

表 2-3-5　有明高専の教育活動の満足しているポイントについて（%）

満足しているポイントの内容	R7
教務関係（授業の内容，カリキュラムなど）	80
学生指導関係（学生への生活指導，部活動など）	45
寮務関係（寮での生活指導など）	16
その他（特にコメント等はありません）	14
その他	3

【(設問 6) 有明高専の教育について】

有明高専の教育についての認知度を表 2-3-6 に示す。複数回答の回答であることから，全回答数に対する各回答の割合を示している。教育の認知度としては「養成すべき人材像」，「入学を求める人の素養（アドミッション・ポリシー)」，「教育理念」の順で高く 50 %前後であった。一方，「すべて知らない」が 15 %あった。教育に関して，もっと知っていただくことが必要であると考えられ，各項目のより高い認知度になるように，学校として取り組んでほしい。

表 2-3-6　有明高専の教育活動の認知度（%）

学年	R7
教育理念	42
養成すべき人材像	52
学習・教育到達目標	33
卒業認定の方針（ディプロマ・ポリシー）	12
教育課程のつくり方・実施の方法の方針（カリキュラム・ポリシー）	13
入学を求める人の素養（アドミッション・ポリシー）	46
教育上の目的	13
以上の項目，全て知らない	15

【(設問 7) 有明高専の教育についての改善について】

有明高専の教育についての改善項目を表 2-3-7 に示す。複数回答の回答であることから，全回答数に対する各回答の割合を示している。「全て知らない 又は 改善が必要な項目はない」が 80 %と最も高い。この中に「全く知らない」も含まれることとから，「改善の必要がない」は 65 %程度であると考えられるが，有明高専の教育を知ってもらうことが重要であると考えられる。改善の項目は高いもので「学習・教育到達目標」で 8 %であり，1 桁パーセントではあるものの今後の動向を注視していく必要がある。

表 2-3-7　有明高専の教育活動の改善について（%）

学年	R7
教育理念	2
養成すべき人材像	4
学習・教育到達目標	8
卒業認定の方針（ディプロマ・ポリシー）	4
教育課程のつくり方・実施の方法の方針（カリキュラム・ポリシー）	4
入学を求める人の素養（アドミッション・ポリシー）	2
教育上の目的	2
以上の項目，全て知らない 又は 改善が必要な項目はない	80

【（設問 8）有明高専についてのご意見】

有明高専のご意見を 116 件いただきました。厚く御礼申し上げます。ここで内容を記述することは避けますが，貴重な意見であることから，運営会議で内容を確認し，建設的なもの，対応できるものは対応するようにお願いしたい。

２．４　既卒業生，既修了生（OB・OG）アンケート

既卒業生，既修了生アンケートは隔年で実施している。今回を含む過去 5 回分の実施時期および回答者数を表 2−1−1 に示す。令和 2 年度と令和 3 年度の卒業生，（2021 年 3 月と 2022 年 3 月卒業：386 名）および令和 4 年度と令和 5 年度の専攻科課程修了生（2023 年・2024 年 3 月修了：61 名）を対象に令和 8 年 3 月に実施したアンケートの分析結果となる。本アンケートは 3 月にメールで依頼を行い，Google フォームを利用して実施している。アンケート回答者は 35 名であった。

表 2−4−1　既卒業生，既修了生（OB・OG）へのアンケートの実施状況

	実施時期	対象者数(名)	回答者数(名) 本科(専攻科)
平成 29 年度	2017 年 9 月	552 名 (2013～2015 年 3 月卒業・修了)	46(13)
令和元年度	2019 年 10 月	648 名 (2015～2017 年 3 月卒業・修了)	44(10)
令和 3 年度	2021 年 11 月	327 名(2017・2018 年 3 月卒業，2019 年・2020 年 3 月修了)	49(14)
令和 5 年度	2023 年 12 月	390 名(2019・2020 年 3 月卒業，2021 年・2022 年 3 月修了)	65(19)
令和 7 年度	2026 年 3 月	447 名(2021・2022 年 3 月卒業，2023 年・2024 年 3 月修了)	31(4)

【準学士課程卒業生】

(1) 教育理念に関する設問

本校では，「求める人材像」である「教育理念」を定めている。令和5年度より，「教育理念」に関するアンケートを実施している。設問は，教育理念で基盤として掲げている幅広い工学基礎，豊かな教養と創造性，多様性，学際性，国際性に富む技術者，加えて地域と密着した開かれた高専（学外との連携協力）の項目で現在の社会の状況を踏まえ，重要度が高い項目を選ぶというアンケートである。「すべて重要度が高い」は23 %であり，これを内数とする準学士課程卒業生の教育理念のアンケート結果を表2−4−2に示す。複数回答可としているため，結果は母数に対する回答数のパーセンテージで示している。「1. 幅広い工学基礎」と「3. 創造性に富む技術者」は80 %と最も高いパーセンテージ，「5. 学際性に富む技術者」は29 %で最も低いパーセンテージあった。

表 2−4−2　準学士課程卒業生が教育理念に掲げる項目で重要度が高いとした項目の結果（%）

教育理念の項目	R7	R5
1. 幅広い工学基礎	80	66
2. 豊かな教養	60	51
3. 創造性に富む技術者	80	72
4. 多様性に富む技術者	49	68
5. 学際性に富む技術者	29	37
6. 国際性に富む技術者	49	52
7. （学外との）連携協力	40	37
8. すべて重要度が高い	(23)	(26)

現在の社会状況を踏まえ，教育理念に新たに取り入れることが望ましい事項の有無についてもアンケートを実施した。その結果，「ある」が29%，「ない」が71%であった。自由記述では，教育理念に関する具体的な意見が寄せられた。これらの意見については，本校運営会議等で共有し，今後の教育理念について検討する際の参考とする。

(2) ディプロマ・ポリシーに関する設問

本校では，平成29年度（2017年度）より卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）を定めている。令和3年度（前回）のアンケート調査までは，準学士課程のディプロマ・ポリシーで育成目標として掲げられた5つの資質・素養を持つ技術者のうち，必要度が高いと思われるものから3つを選択する設問（複数回答可）を実施してきた。このアンケートでは，低いパーセンテージが要改善のディプロマ・ポリシーとは限らないことから，令和5年度からは，5つのディプロマ・ポリシーの育成目標に掲げられた5つの資質・素養を持つ技術者のうち，現在の社会状況を踏まえ，重要度が高いものをすべて選ぶ方法に変更した。「すべて重要度が高い」は31 %あり，これを内数とするディプロマ・ポリシーのアンケート結果を表2−4−3に示す。複数回答可としているため，結果は母数に対する回答数のパーセンテージで示している。令和7年度は，「専門工学に関する高度な知識と創造性に富み，実践力を身につけた技術者」が83%と最も高く，令和5年度の67%を16

ポイント上回った。一方,「国際社会で活躍できる広い視野と教養をもつ技術者」は46%と最も低く，最も高い項目との間に37ポイントの差がみられた。同項目は令和5年度においても55%と最も低かったことから，重要度が高いとした割合が相対的に低い傾向がみられる。今後も回答結果を継続的に確認する必要がある。

表 2−4−3　ディプロマ・ポリシーで重要度が高いとした項目のアンケート結果（%）

ディプロマ・ポリシーの育成目標	R7	R5
幅広い工学に関する基礎知識と主体性を身につけた技術者	69	75
専門工学に関する高度な知識と創造性に富み，実践力を身につけた技術者	83	67
自己啓発・向上能力に富み,「ものづくり」を通して社会の発展に貢献できる技術者	60	69
多様な価値観を理解し，学際的な技術分野で活躍できる技術者	49	56
国際社会で活躍できる広い視野と教養をもつ技術者	46	55
すべて重要度が高い	(31)	(38)

本校では，ディプロマ・ポリシーを満たすため,「卒業までに達成すべき9つの学習・教育到達目標」を定めている。令和3年度までのアンケート調査では，学習・教育到達目標のうち，不要だと思われる項目があれば選択する設問（複数回答可）を実施してきたが，令和5年度からは回答者の混乱を避けるため,「教育理念」及び「ディプロマ・ポリシー」と同様に，卒業までに達成すべき9つの学習・教育到達目標の中から重要度が高いと思われる項目を選択する設問（複数回答可）に変更した。「すべて重要度が高い」は43%であり，これを内数とする学習・教育到達目標のアンケート結果を表2−4−4に示す。複数回答可としているため，結果は回答者数に対する回答数の割合で示している。

令和7年度は,「(A-3) コミュニケーション能力」及び「(B-3) 実践力」が77%と最も高く,「(A-2) 倫理観」は54%と最も低かった。令和3年度までのアンケートでは，不要だと思われる項目が「ない」とした割合は，令和3年度が60%，令和元年度が68%であった。一方，設問形式を変更した令和5年度以降の「すべて重要度が高い」は，令和5年度が37%，令和7年度が43%であった。設問形式が異なるため単純に比較することはできないが, いずれもすべての項目を肯定的に捉える回答である。令和7年度は令和5年度を6ポイント上回った。今後も回答結果を継続的に確認する必要がある。

表 2−4−4　学習・教育到達目標で重要度が高いとした項目のアンケート結果（%）

学習・教育到達目標	R7	R5
(A-1) 考察力：地球的視野から物事を多面的に考察できること	60	59
(A-2) 倫理観：社会や自然の中での技術の役割を理解し，技術者としての責任を自覚できること	54	55
(A-3) コミュニケーション能力：適切かつ円滑に読解・表現ができること	77	86
(B-1) 基礎知識：専門分野の基礎となる内容を理解していること	71	68
(B-2) 専門知識：専門分野の内容を理解していること	66	57
(B-3) 実践力：実験・実習等の内容を理解・実行・考察できること	77	62
(B-4) 学際的知識：様々な分野の知識と技術を理解し，複合的に活用するための視野を持っていること	57	49
(C-1) 課題探究力：自ら課題を発見し，その本質を理解できること	69	66
(C-2) 課題解決力：身につけた教養と実践力を活用し，課題を解決できること	63	62
すべて重要度が高い	(43)	(37)

現在の社会状況を踏まえ，学習・教育到達目標に新たに取り入れることが望ましい事項の有無についてもアンケートを実施した。その結果,「ある」が20%,「ない」が80%であった。自由記述では，学習・教育到達目標に関する具体的な意見が寄せられた。これらの意見については，本校運営会議等で共有し，今後の学習・教育到達目標の見直しを検討する際の参考とする。

(3)「準学士課程」卒業時における，準学士課程での各種教育に対する到達度に関する設問

就職・進学後のいまの状況を考慮し，有明高専「準学士課程」卒業時を振り返ってみて，準学士課程卒業時に身に付けた学力，資質・能力についての成果のアンケート結果を過去のアンケート結果と合わせたものを表2−4−5に示す。

R7年度は，一般教育（文系）において,「十分に身に付いていた」と「身に付いていた」を合わせた割合が49%となり，R5年度の79%から低下した。また,「身に付いていない部分があった」が37%,「身に付いていたとはいえなかった」が14%となっており，他の教育区分と比較して厳しい評価となった。また,「十分に身に付いていた」と「身に付いていた」を合わせた割合は，一般教育（理系）では74%（R5年度84%），専門教育（学力）では72%（R5年度84%），専門教育（資質・能力）では80%（R5年度94%）となり，いずれもR5年度を下回った。特に，すべての教育区分において「身に付いていない部分があった」の割合が増加している

ことから，準学士課程卒業時に身に付けた学力，資質・能力に関する評価について，その要因を検討するとともに，今後の動向を注視する必要がある。

表 2−4−5　各種教育の学力，資質・能力についてのアンケート結果（%）

	一般教育（文系）			一般教育（理系）			専門教育（学力）			専門教育（資質・能力）		
	R7	R5	R3	R7	R5	R3	R7	R5	R3	R7	R5	R3
十分身に付いていた（学習成果評価 80 点以上）	20	28	26	23	32	57	23	26	54	34	31	60
身に付いていた（学習成果評価 60 点以上 80 点未満）	29	51	43	51	52	34	49	58	43	46	63	31
身に付いていない部分があった（学習成果評価 30 点以上 60 点未満）	37	20	31	26	15	9	29	15	3	20	5	9
身に付いていたとはいえなかった（学習成果評価 30 点未満）	14	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0

（R3 年度までは「良かった」の段階的評価の選択，R5 年度からは「身に付いた」の段階的評価の選択）

(4) その他の設問

表2−4−6に就職・進学後のいまの状況を考慮して，高専卒業時に学生が特に身に付けておかなければならない能力に関するアンケート結果を示す。複数回答が可であり，結果は母数に対する回答数のパーセンテージで示し，令和5年度のアンケート結果に対して，10％以上上がったものに数値の横に↑，10％以上下がったものに数値の横に↓を付した。多くの項目で大きく変化していることから，今後の動向を注視する必要がある。

表2-1-7に，有明高専のカリキュラムで学んだこと（講義，実験，実習，演習，卒研など）が，現在，役に立っているかについてのアンケート結果を示す。令和5年度のアンケート結果に対して，10ポイント以上上がったものに数値の横に↑，10ポイント以上下がったものに数値の横に↓を付した。令和7年度は，「役に立っている」と「おおむね役に立っている」を合わせた肯定的回答が80％であり，令和5年度の88％を8ポイント下回ったものの，令和3年度の74％を上回った。今後も回答結果を継続的に確認する必要がある。

自由記述では，今後の有明高専の教育及び学校運営の改善に関する具体的な意見が寄せられた。これらの意見については，本校運営会議等で共有し，今後の教育内容及び学校運営の改善に活用する。

表 2−4−6　高専卒業時に学生が特に身につけておかなければならない能力に関するアンケート結果（%）

項目	R7	R5	R3
専門の基礎知識	46 ↓	62 ↑	51
専門知識の応用力	43 ↑	28 ↑	17
一般的教養	40 ↓	52 ↑	26
学習意欲	54 ↑	38 ↓	63
語学力	43 ↑	28 ↓	40
創意・工夫能力	37	38 ↑	29
プレゼンテーション能力	46	46	40
健康・体力	34 ↑	18	20
コミュニケーション能力	60	68 ↓	80
その他	0	0	3

表 2−4−7　有明高専のカリキュラムで学んだことが現在役に立っているかのアンケート結果（%）

	R7	R5	R3
役に立っている	26 ↓	37 ↑	23
おおむね役に立っている	54	51	51
あまり役に立っていない	20	12 ↓	26
役に立っていない	0	0	0

【専攻科課程修了生】

2023年3月修了生及び2024年3月修了生のうち4 名からアンケートへの回答が得られた。

(1) 教育理念に関する設問

本校では,「求める人材像」である「教育理念」を定めている。令和5年度から「教育理念」に関するアンケートを実施した。設問は，準学士課程と同じである。専攻科課程修了生の教育理念に関するアンケート結果を表2−4−8に示す。結果は複数回答可としているため，回答者数に対する回答数のパーセンテージで示している。

令和7年度の回答では，「3．創造性に富む技術者」を4名全員が重要度の高い項目として選択し，「1．幅広い工学基礎」を3名が選択した。一方，「2．豊かな教養」および「4．多様性に富む技術者」を選択した者は，それぞれ1名であった。ただし，令和7年度の回答者数は4名であり，1名の回答が25ポイントに相当することから，年度間の割合の差のみをもって傾向を判断することは難しい。本結果は参考値として取り扱い，今後の回答結果を蓄積した上で，継続的に傾向を確認する必要がある。

表 2−4−8　専攻科課程修了生が教育理念に掲げる項目で重要度が高いとした項目の結果（%）

教育理念の項目	R7	R5
1. 幅広い工学基礎	75	53
2. 豊かな教養	25	32
3. 創造性に富む技術者	100	79
4. 多様性に富む技術者	25	68
5. 学際性に富む技術者	0	37
6. 国際性に富む技術者	0	53
7. （学外との）連携協力	0	37
8. すべて重要度が高い	(0)	(21)

(2) ディプロマ・ポリシーに関する設問

令和7年度は，「工学の基礎知識，工学の専門知識及び高度に融合された学際的知識を有し，実践力に富む高度な技術者」を4名全員が重要度の高い項目として選択した。また，「物事を多面的に考察できる力，社会における技術者の責任を自覚できる高い倫理観，及び優れたコミュニケーション能力を備えた高度な技術者」及び「課題の探求能力に優れ，またその課題を解決する方法を提案できる高度な技術者」は，それぞれ3名が選択した。3項目すべてを重要度が高いとした者は2名であった。

ただし，令和7年度の回答者数は4名であり，1名の回答が25ポイントに相当するため，令和5年度との割合の差のみをもって傾向を判断することは難しい。このため，本結果は参考値として取り扱い，今後の回答結果を蓄積した上で，ディプロマ・ポリシーに対する修了生の認識について継続的に確認する必要がある。

表 2−4−9　ディプロマ・ポリシーで重要度が高いとした項目のアンケート結果（%）

ディプロマ・ポリシーの育成目標	R7	R5
物事を多面的に考察できる力，社会における技術者の責任を自覚できる高い倫理観，及び優れたコミュニケーション能力を備えた高度な技術者	75	89
工学の基礎知識，工学の専門知識及び高度に融合された学際的知識を有し，実践力に富む高度な技術者	100	79
課題の探求能力に優れ，またその課題を解決する方法を提案できる高度な技術者	75	63
すべて重要度が高い	(50)	(33)

本校では，専攻科課程のディプロマ・ポリシーを満たすため，「専攻科課程修了までに達成すべき9つの学習・教育到達目標」を定めている。令和3年度までのアンケート調査では，学習・教育到達目標のうち，不要だと思われる項目があれば選択する設問としていたが，令和5年度からは，「教育理念」及び「ディプロマ・ポリシー」と同様に，修了までに達成すべき9つの学習・教育到達目標の中から重要度が高いと思われる項目を選択する設問に変更した。令和7年度の結果を表2−4−10に示す。複数回答可としているため，結果は回答者数に対する回答数の割合で示している。

令和7年度の結果では，「(C-2) 課題解決力」を4名全員が重要度の高い項目として選択し，「(A-2) 高い倫理観」及び「(B-2) 工学の専門知識」をそれぞれ3名が選択した。一方，「(A-3) コミュニケーション能力」を選択した者及び9項目すべてを重要度が高いとした者はいなかった。ただし，回答者数は4名であり，1名の回答が25ポイントに相当するため，各項目の割合や年度間の差については参考値として捉える必要があ

る。今後も回答結果を蓄積し，学習・教育到達目標に対する修了生の認識について継続的に確認する必要がある。

表 2−4−10　学習・教育到達目標で重要度が高いとした項目のアンケート結果（%）

学習・教育到達目標	R7	R5
(A-1) 多面的考察力：物事を多面的に考察できること	50	68
(A-2) 高い倫理観：技術者としての倫理観を確立できること	75	68
(A-3) コミュニケーション能力：日本語及び外国語によるコミュニケーションを適切にできること	0	74
(B-1) 工学の基礎知識：工学の基礎知識を専門に応用できるまで理解できること	50	68
(B-2) 工学の専門知識：工学の専門知識を深く理解できること	75	63
(B-3) 実践力：実験・実習等を確実に実践できること	50	63
(B-4) 工学の学際的知識：工学の学際的知識を専門知識に活用できる程度に習得すること	50	58
(C-1) 課題探究力：現状を進展させるための課題の探求・理解が自らできること	50	68
(C-2) 課題解決力：様々な問題に対処できるデザイン能力を習得すること	100	63
すべて重要度が高い	(0)	(37)

現在の社会状況から，学習・教育到達目標の中に取り入れることが望ましい事項に関してアンケートを実施した。「ある」の回答は2名で，プレゼンテーション能力とチームワーク力に関する意見が寄せられた。

(3) 各種学習・教育に対する成果評価に関する設問

令和7年度の結果では，一般教育（理系），専門教育（学力）及び専門教育（資質・能力）について，回答者4名全員が「良かった」又は「おおむね良かった」と回答した。一般教育（文系）については，3名が「良かった」又は「おおむね良かった」と回答した一方，1名が「あまり良くなかった」と回答した。また，いずれの教育区分においても，「良くなかった」と回答した者はいなかった。

ただし，令和7年度の回答者数は4名であり，1名の回答が25ポイントに相当することから，過年度との割合の差のみをもって傾向を判断することは難しい。本結果は参考値として取り扱い，今後も回答結果を蓄積し，専攻科課程修了時に身に付けた学力，資質・能力に対する修了生の評価について継続的に確認する必要がある。

表 2−4−11　各種教育の学力，資質・能力についてのアンケート結果（%）

	一般教育（文系）			一般教育（理系）			専門教育（学力）			専門教育（資質・能力）		
	R7	R5	R3	R7	R5	R3	R7	R5	R3	R7	R5	R3
良かった（学習成果評価 80 点以上）	25	42	36	50	53	64	50	47	79	25	47	64
おおむね良かった（学習成果評価 60 点以上 80 点未満）	50	58	36	50	32	36	50	37	21	75	47	29
あまり良くなかった（学習成果評価 30 点以上 60 点未満）	25	0	29	0	16	0	0	16	0	0	5	7
良くなかった（学習成果評価 30 点未満）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

(4) その他の設問

令和7年度の結果では，「専門の基礎知識」，「専門知識の応用力」及び「学習意欲」を，それぞれ回答者4名のうち3名が，準学士課程卒業時から専攻科課程修了時までの間に特に身に付けておかなければならない能力として選択した。また，「プレゼンテーション能力」及び「コミュニケーション能力」をそれぞれ2名が，「創意・工夫能力」及び「健康・体力」をそれぞれ1名が選択した。一方，「一般的教養」，「語学力」及び「その他」を選択した者はいなかった。

ただし，令和7年度の回答者数は4名であり，1名の回答が25ポイントに相当することから，令和5年度との割合の差のみをもって傾向を判断することは難しい。本結果は参考値として取り扱い，今後も回答結果を蓄積し，修了生が必要と考える能力について継続的に確認する必要がある。

表2−4−13に，専攻科課程で学んだカリキュラムが現在役に立っているかについての結果を示す。令和7年度は，「役に立っている」と回答した者が2名，「おおむね役に立っている」と回答した者が2名であり，回答者4名全員が肯定的に評価していた。「あまり役に立っていない」及び「役に立っていない」と回答した者はいなかった。

ただし，回答者数が4名と少ないため，年度間の割合の差については参考値として捉える必要がある。今後も回答結果を蓄積し，専攻科課程のカリキュラムが修了後にどのように活用されているかを継続的に確認する必要がある。

自由記述では，今後の有明高専の教育改善に関する具体的な意見が寄せられた。これらの意見については，本校運営会議等で共有し，今後の教育内容及び教育環境の改善に活用する。

表 2−4−12　卒業時から修了時に学生が特に身につけておかなければならない能力のアンケート結果（%）

項目	R7	R5	R3
専門の基礎知識	75	37	36
専門知識の応用力	75	47	29
一般的教養	0	42	29
学習意欲	75	47	71
語学力	0	26	43
創意・工夫能力	25	32	21
プレゼンテーション能力	50	53	64
健康・体力	25	16	14
コミュニケーション能力	50	63	79
その他	0	0	7

表 2−4−13　有明高専のカリキュラムで学んだことが現在役に立っているかのアンケート結果（%）

	R7	R5	R3
役に立っている	50	26	57
おおむね役に立っている	50	47	43
あまり役に立っていない	0	26	0
役に立っていない	0	0	0

２．５　就職先（企業等）アンケート

卒業生，修了生の就職先（企業等）のアンケートは隔年で実施している。今回を含む過去5回分の実施時期および回答者数を表2−5−1に示す。企業アンケートは2年ごとに実施しており，今回は令和7年度に実施したアンケートの分析である。本アンケートは令和8年4月に書面（郵送）で204社に依頼を行い，google formを利用して実施している。回答社は72社であり，回答社数は前回の令和5年度より減少したものの，回答率はほぼ横ばいであった。現在のアンケート方法に大きな問題がないように思われるが，今後，アンケート回答率を更に上げていく方法を考え，実施していく必要がある。なお，今回はアンケートの郵送準備に時間を要したことにより実施時期が遅れてしまったため，次回以降アンケートの準備を早める必要がある。

表 2−5−1　企業アンケートの実施状況一覧（過去 5 回

	実施時期	調査企業数（社）	回答企業数（社）	回答率（%）
平成 29 年度	平成 29 年 9 月	351	126	36
令和元年度	令和元年 10 月	346	115	33
令和 3 年度	令和 3 年 12 月	223	91	41
令和 5 年度	令和 5 年 12 月	209	81	39
令和 7 年度	令和 8 年 4 月	204	72	35

【回答いただいた企業の学生の入社状況】

今回回答いただいた企業への就職は，準学士課程卒業生の企業は78 %，専攻科課程修了生の企業は10 %，準学士課程卒業生・専攻科課程修了生どちらもが12 %であった。

＜準学士課程卒業生の入社企業からのアンケート結果＞

【本校の教育理念に関する設問】

本校では，「求める人材像」である「教育理念」を定めている。令和5年度より，「教育理念」に関するアンケートを実施している。設問は，教育理念で基盤として掲げている幅広い工学基礎，豊かな教養と創造性，多様性，学際性，国際性に富む技術者，加えて地域と密着した開かれた高専（学外との連携協力）の項目で企業の立場から見て，重要度の高い項目を選ぶというアンケートである。「すべて重要度が高い」は30 %あり，これを内数とする教育理念のアンケート結果を表2−5−2に示す。複数回答可としているため，結果は母数に対する回答数のパーセンテージで示している。「1. 幅広い工学基礎」，「2. 豊かな教養」，「3. 創造性に富む技術者」はいずれも70 %以上と高いパーセンテージを示している一方で，「5. 学際性に富む技術者」，「6. 国際性に富む技術者」は30 %代と低いパーセンテージであった。「5. 学際性に富む技術者」，「6. 国際性に富む技術者」については令和5年度から続けて低いパーセンテージとなっているため，今後の動向を注視する必要がある。

表2−5−2　教育理念に掲げる項目で重要度が高いとした項目の結果（%）

教育理念の項目	R7	R5
1. 幅広い工学基礎	80	70
2. 豊かな教養	80	64
3. 創造性に富む技術者	73	76
4. 多様性に富む技術者	64	69
5. 学際性に富む技術者	39	39
6. 国際性に富む技術者	34	25
7.（学外との）連携協力	50	39
8. すべて重要度が高い	(30)	(23)

【準学士課程のディプロマ・ポリシーについて】

本校では，平成29年度（2017年度）より卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）を定めている。令和3年度より，準学士課程のディプロマ・ポリシーの育成目標で掲げられた5つの資質・素養を持つ技術者のうち，企業の立場からみて，重要度が高いと思われるものを選択する設問（複数回答可）でアンケートを実施している。「すべて重要度が高い」は33 %あり，これを内数とするディプロマ・ポリシーのアンケート結果を表2−5−3に示す。複数回答可としているため，結果は母数に対する回答数のパーセンテージで示している。「幅広い工学に関する基礎知識と主体性を身につけた技術者」と「自己啓発・向上能力に富み，「ものづくり」を通して社会の発展に貢献できる技術者」は87 %と最も高いパーセンテージであった。一方，「国際社会で活躍できる広い視野と教養をもつ技術者」は38 %と最も低いパーセンテージであった。令和5年度から

「すべて重要度が高い」の項目を追加し，アンケートとしての初期値を示しているものの，令和3年度からのアンケート内容は同じであり，継続して「国際社会で活躍できる広い視野と教養をもつ技術者」は最も低いパーセンテージであった。上述のように，教育理念においても，「6. 国際性に富む技術者」は低いパーセンテージであり，企業の立場からは，国際性の重要性は重要度が高くないことも考えられることから，今後の動向を注視する必要がある。

表2−5−3　ディプロマ・ポリシーで重要度が高いとした項目のアンケート結果（%）

ディプロマ・ポリシーの育成目標	R7	R5	R3
幅広い工学に関する基礎知識と主体性を身につけた技術者	87	82	66
専門工学に関する高度な知識と創造性に富み，実践力を身につけた技術者	70	69	44
自己啓発・向上能力に富み，「ものづくり」を通して社会の発展に貢献できる技術者	87	80	60
多様な価値観を理解し，学際的な技術分野で活躍できる技術者	57	60	23
国際社会で活躍できる広い視野と教養をもつ技術者	38	34	14
すべて重要度が高い	(33)	(33)	−

本校では，ディプロマ・ポリシーを満たすために定めている卒業までに達成すべき9つの学習・教育到達目標を定めている。これについて，卒業までに達成すべき9つの学習・教育到達目標の中で重要だと思われる項目を選ぶ設問（複数回答可）で，令和5年度からアンケートを実施している。「すべて重要度が高い」は41 %あり，これを内数とする学習・教育到達目標のアンケート結果を表2−5−4に示す。複数回答可としているため，結果は母数に対する回答数のパーセンテージで示している。「(A-3) コミュニケーション能力」は98 %と最も高いパーセンテージであった。一方，「(B-4) 学際的知識」は52 %と最も低いパーセンテージであった。令和5年度より同様の傾向にあるため，今後の動向を注視する必要がある。

表2−5−4　学習・教育到達目標で重要度が高いとした項目のアンケート結果（%）

学習・教育到達目標	R7	R5
(A-1)考察力:地球的視野から物事を多面的に考察できること	60	53
(A-2)倫理観:社会や自然の中での技術の役割を理解し,技術者としての責任を自覚できること	75	67
(A-3)コミュニケーション能力:適切かつ円滑に読解・表現ができること	98	88
(B-1)基礎知識:専門分野の基礎となる内容を理解していること	81	79
(B-2)専門知識:専門分野の内容を理解していること	62	57
(B-3)実践力:実験・実習等の内容を理解・実行・考察できること	75	63
(B-4)学際的知識:様々な分野の知識と技術を理解し,複合的に活用するための視野を持っていること	52	49
(C-1)課題探究力:自ら課題を発見し,その本質を理解できること	84	75
(C-2)課題解決力:身につけた教養と実践力を活用し,課題を解決できること	89	75
すべて重要度が高い	(41)	(37)

企業の立場から，ディプロマ・ポリシーに対して，ご意見をお聞かせいただいております。貴重な具体的なご意見をいただき，ありがとうございます。この場を借りて御礼申し上げます。ご意見に関しましては，本校運営会議に報告し，今後のディプロマ・ポリシーの議論に活用させていただきます。

【準学士課程卒業生に関する設問】

準学士課程の学習・教育到達目標に企業の立場から，取り入れることが望ましい項目に関するアンケート結果を表 2−5−5 に示す。複数回答可としているため，結果は母数に対する回答数のパーセンテージで示している。「高度なコミュニケーション力」が高いパーセンテージとなっている。その他項目については，パーセンテージが低く，今後の動向を注視する必要がある。

表 2−5−5　学習・教育到達目標に加えることが望ましい項目のアンケート結果（%）

加えることが望ましい項目	R7
高度な専門の知識・技術	46
地球環境問題に対応する知識・技術	23
人間科学・生命科学の知識・技術	5
地域固有技術	0
技術と社会科学を融合させる知識	17
起業家育成	3
高度なものづくり(設計・製造)技術	37
高度なコミュニケーション力	72
その他	2

準学士課程卒業生の入社時の学力，資質・能力に関しての評価に関する調査についてのアンケート結果を表2−5−6に示す。入社時の学力，資質・能力については，令和5年度より「満足」,「おおむね満足」を合わせたパーセンテージが90 %以上となっている。このような傾向が続くことを期待するとともに，今後の動向を注視する必要がある。

表2−5−6　入社時の本校卒業生の学力，資質・能力についてのアンケート結果（%）

項目	R7	R5	R3	R1
満足	59	62	40	35
おおむね満足	31	30	48	50
普通	6	7	6	8
やや不満	2	0	0	1
不満	0	0	2	0
わからない	2	1	4	6

（令和元年度に関しては入社時の実力としてアンケートを実施した）

準学士課程卒業生に関して，ご意見・ご要望等をお聞かせいただいております。貴重な具体的なご意見をいただき，ありがとうございます。この場を借りて御礼申し上げます。ご意見に関しましては，本校運営会議に報告し，今後の準学士課程の議論に活用させていただきます。

【準学士課程卒業生への『数理・データサイエンス･AI(リテラシーレベル)』の教育プログラムについて】

本校では，平成30年度以降に入学する全ての学生に対する『数理・データサイエンス・AI（リテラシーレベル)』の教育プログラムの認定を受けている。令和7年度より，本プログラムの修了生である，入社した準学士課程卒業生の評価（活躍状況など）を調査する。アンケート結果を表2−5−7に示す。「満足」,「おおむね満足」を合わせたパーセンテージが74 %となっており，一定の評価が得られている。しかし,「やや不満」が3 %あることから今後の動向を注視する必要がある。

表2−5−7　『数理・データサイエンス・AI（リテラシーレベル)』の教育プログラムを修了した本校卒業生の評価（活躍状況など）についてのアンケート結果（%）

項目	R7
満足	42
おおむね満足	32
普通	11
やや不満	3
不満	0
わからない	12

『数理・データサイエンス・AI（リテラシーレベル)』の教育プログラムを修了した準学士課程卒業生に関して，ご意見・ご要望等をお聞かせいただいております。貴重な具体的なご意見をいただき，ありがとうご

ざいます。この場を借りて御礼申し上げます。ご意見に関しましては，本校運営会議に報告し，今後の準学士課程の議論に活用させていただきます。

＜専攻科課程修了生の入社企業からのアンケート結果＞

【本校の教育理念に関する設問】

本校では，「求める人材像」である「教育理念」を定めている。令和5年度より，「教育理念」に関するアンケートを実施している。設問は，教育理念で基盤として掲げている幅広い工学基礎，豊かな教養と創造性，多様性，学際性，国際性に富む技術者，加えて地域と密着した開かれた高専（学外との連携協力）の項目で企業の立場から見て，重要度の高い項目を選ぶというアンケートである。「すべて重要度が高い」は31％あり，これを内数とする教育理念のアンケート結果を表2−5−8に示す。複数回答可としているため，結果は母数に対する回答数のパーセンテージで示している。「1. 幅広い工学基礎」が100％と最も高いパーセンテージであった。一方，「5. 学際性に富む技術者」，「6. 国際性に富む技術者」，「7. （学外との）連携協力」は令和5年度より大幅にパーセンテージが低下していることから，今後の動向を注視する必要がある。

表2−5−8　教育理念に掲げる項目で重要度が高いとした項目の結果（%）

教育理念の項目	R7	R5
1. 幅広い工学基礎	100	90
2. 豊かな教養	88	70
3. 創造性に富む技術者	69	80
4. 多様性に富む技術者	63	80
5. 学際性に富む技術者	38	60
6. 国際性に富む技術者	31	60
7.（学外との）連携協力	38	60
8. すべて重要度が高い	(31)	(60)

【専攻科課程のディプロマ・ポリシーについて】

本校では，平成29年度（2017年度）より専攻科課程修了認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）を定めている。令和3年度より，専攻科課程のディプロマ・ポリシーで育成目標として掲げられた3つの資質・素質を持つ技術者のうち，企業の立場から見て，重要度が高いと思われるものを選択する設問（複数回答可）でアンケートを実施している。「すべて重要度が高い」は69％あり，これを内数とするディプロマ・ポリシーのアンケート結果を表2−5−9に示す。複数回答可としているため，結果は母数に対する回答数のパーセンテージで示している。すべての項目が75％を越えており，良好な結果であった。しかし，令和5年度より「工学の基礎知識，工学の専門知識及び高度に融合された学際的知識を有し，実践力に富む高度な技術者」のパーセンテージが大きく低下していることから，今後の動向を注視する必要がある。

表2−5−9　ディプロマ・ポリシーで重要度が高いとした項目のアンケート結果（%）

ディプロマ・ポリシーの育成目標	R7	R5	R3
物事を多面的に考察できる力，社会における技術者の責任を自覚できる高い倫理観，及び優れたコミュニケーション能力を備えた高度な技術者	94	90	85
工学の基礎知識，工学の専門知識及び高度に融合された学際的知識を有し，実践力に富む高度な技術者	75	100	35
課題の探求能力に優れ，またその課題を解決する方法を提案できる高度な技術者	81	90	65
すべて重要度が高い	(69)	(90)	−

本校では，専攻科課程のディプロマ・ポリシーを満たすための「専攻科課程修了までに達成すべき9つの学習・教育到達目標」を定めている。これについて，修了までに達成すべき9つの学習・教育到達目標の中で，企業の立場から見て，重要だと思われる項目を選ぶ設問（複数回答可）で，令和5年度からアンケートを実施している。「すべて重要度が高い」は44％あり，これを内数とする学習・教育到達目標のアンケート結果を表2−5−10に示す。複数回答可としているため，結果は母数に対する回答数のパーセンテージで示している。令和5年度より引き続き「(A-1) 多面的考察力：物事を多面的に考察できること」，「(A-3) コミュニケーション能力：日本語及び外国語によるコミュニケーションを適切にできること」，「(C-1) 課題探究力：現状を進展させるための課題の探求・理解が自らできること」が高いパーセンテージだったのに対して，「(B-2) 工学の専門知識：工学の専門知識を深く理解できること」，「(B-3) 実践力：実験・実習等を確実に実践できること」，「(B-4) 工学の学際的知識：工学の学際

的知識を専門知識に活用できる程度に習得すること」はパーセンテージが低くなっていることから，今後の動向を注視する必要がある。

表2−5−10　学習・教育到達目標で重要度が高いとした項目のアンケート結果（%）

学習・教育到達目標	R7	R5
(A-1) 多面的考察力：物事を多面的に考察できること	88	80
(A-2) 高い倫理観：技術者としての倫理観を確立できること	81	70
(A-3) コミュニケーション能力：日本語及び外国語によるコミュニケーションを適切にできること	94	90
(B-1) 工学の基礎知識：工学の基礎知識を専門に応用できるまで理解できること	75	90
(B-2) 工学の専門知識：工学の専門知識を深く理解できること	63	70
(B-3) 実践力：実験・実習等を確実に実践できること	63	90
(B-4) 工学の学際的知識：工学の学際的知識を専門知識に活用できる程度に習得すること	56	70
(C-1) 課題探究力：現状を進展させるための課題の探求・理解が自らできること	88	90
(C-2) 課題解決力：様々な問題に対処できるデザイン能力を習得すること	75	70
すべて重要度が高い	(44)	(70)

【専攻科課程修了生に関する設問】

専攻科課程の学習・教育到達目標に企業の立場から，取り入れることが望ましい項目に関するアンケート結果を表2−5−11に示す。令和5年度から，「ない」の選択肢をやめているが，複数回答可としているため，結果は母数に対する回答数のパーセンテージで示している。令和3年度より継続して「高度なコミュニケーション力」が高いパーセンテージとなっている。また，令和5年度に続き「高度な専門の知識・技術」が60％以上となっている。その他項目については，アンケートの年度により結果が異なることから，今後の動向を注視する必要がある。

表2−5−11　学習・教育到達目標に加えることが望ましい項目のアンケート結果（%）

加えることが望ましい項目	R7	R5	R3
高度な専門の知識・技術	63	60	38
地球環境問題に対応する知識・技術	25	40	13
人間科学・生命科学の知識・技術	0	10	6
地域固有技術	0	0	13
技術と社会科学を融合させる知識	19	30	31
起業家育成	0	0	6
高度なものづくり(設計・製造)技術	31	80	31
高度なコミュニケーション力	81	70	75
その他	0	0	0
ない	−	−	25

専攻科課程修了生に関して，ご意見・ご要望等をお聞かせいただいております。貴重な具体的なご意見をいただき，ありがとうございます。この場を借りて御礼申し上げます。ご意見に関しましては，本校運営会議に報告し，今後の専攻科課程の議論に活用させていただきます。

【専攻科課程修了生への『数理・データサイエンス･AI(リテラシーレベル)』の教育プログラムについて】

本校では，平成30年度以降に入学する全ての学生に対する『数理・データサイエンス・AI（リテラシーレベル)』の教育プログラムの認定を受けている。令和7年度より，本プログラムの修了生である，入社した専攻科課程修了生の評価（活躍状況など）を調査する。アンケート結果を表2−5−12に示す。「満足」,「おおむね満足」を合わせたパーセンテージが63％だが,「分からない」を除いた評価されている中でのパーセンテージは83 %と高かった。今年度からのアンケート調査のため，この水準が維持されていくのか，今後の動向を注視する必要がある。

表2−5−12　『数理・データサイエンス・AI（リテラシーレベル)』の教育プログラムを修了した専攻科修了生の評価（活躍状況など）についてのアンケート結果（%）

項目	R7
満足	50
おおむね満足	13
普通	13
やや不満	0
不満	0
わからない	25

『数理・データサイエンス・AI（リテラシーレベル)』の教育プログラムを修了した専攻科課程修了生に関して，ご意見・ご要望等をお聞かせいただいております。貴重な具体的なご意見をいただき，ありがとうございます。この場を借りて御礼申し上げます。ご意見に関しましては，本校運営会議に報告し，今後の準学士課程の議論に活用させていただきます。

２．６　進学先（大学・大学院等）アンケート

進学先（大学・大学院等）へのアンケートは令和3年度から実施しており，準学士課程から大学編入学および専攻科課程から大学院へ入学した大学・大学院にアンケートを行った。実施時期および回答者数を表2−6−1に示す。本アンケートは令和8年4月に書面（郵送）で依頼を行い，google formを利用して実施している。今年度は令和6年度，7年度に編入学および大学院入学をした学生がいる27の大学，大学院に送付・依頼し，10の大学，大学院から回答が得られた(大学3年次編入8件,大学院入学2件)。回答率は37％であった。回答率が低下しているため，今後のアンケート依頼については検討する必要がある。なお，今回はアンケートの郵送準備に時間を要したことにより実施時期が遅れてしまったため，次回以降アンケートの準備を早める必要もある。

表2−6−1　大学等アンケートの実施状況一覧

	実施時期	調査数	回答数	回答率（%）
令和３年度	令和４年１月	23	13	57
令和５年度	令和５年 12 月	14	19	136
令和７年度	令和８年４月	27	10	37

（令和5年度については，一大学（一大学院）で複数の学科等に進学があった場合，複数回答あった。）

＜大学へ編入学した学生（準学士課程卒業生）に対するアンケート結果＞

【本校の教育理念に関する設問】

本校では，「求める人材像」である「教育理念」を定めている。令和5年度より，「教育理念」に関するアンケートを実施した。設問は，教育理念で基盤として掲げている幅広い工学基礎，豊かな教養と創造性，多様性，学際性，国際性に富む技術者，加えて地域と密着した開かれた高専（学外との連携協力）の項目で，大学の立場から見て，重要度の高い項目を選ぶというアンケートである。「すべて重要度が高い」は63 %あり，これを内数とする教育理念のアンケート結果を表2−6−2に示す。複数回答可としているため，結果は母数に対する回答数のパーセンテージで示している。「1. 幅広い工学基礎」，「2. 豊かな教養」が100％と最も高いパーセンテージであった。一方，「7. （学外との）連携協力」は63％と最も低いパーセンテージとなっており，今後の動向を注視する必要がある。

表2−6−2　教育理念に掲げる項目で重要度が高いとした項目の結果（%）

教育理念の項目	R7	R5
1. 幅広い工学基礎	100	77
2. 豊かな教養	100	94
3. 創造性に富む技術者	88	83
4. 多様性に富む技術者	75	83
5. 学際性に富む技術者	75	65
6. 国際性に富む技術者	75	83
7.（学外との）連携協力	63	77
8. すべて重要度が高い	(63)	(65)

【準学士課程のディプロマ・ポリシーについて】

本校では，平成29年度（2017年度）より卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）を定めている。令和3年度より，準学士課程のディプロマ・ポリシーの育成目標で掲げられた5つの資質・素養を持つ技術者のうち，大学の立場からみて，重要度が高いと思われるものを選択する設問（複数回答可）でアンケートを実施している。「すべて重要度が高い」は75％あり，これを内数とするディプロマ・ポリシーのアンケート結果を表2−6−3に示す。複数回答可としているため，結果は母数に対する回答数のパーセンテージで示している。すべての項目で75％以上の高いパーセンテージであったものの，令和5年度より「多様な価値観を理解し，学際的な技術分野で活躍できる技術者」，「国際社会で活躍できる広い視野と教養をもつ技術者」については，ややパーセンテージの低下があるため，今後の動向を注視する必要がある。

表2−6−3　ディプロマ・ポリシーで重要度が高いとした項目のアンケート結果（%）

ディプロマ・ポリシーの育成目標	R7	R5	R3
幅広い工学に関する基礎知識と主体性を身につけた技術者	100	100	70
専門工学に関する高度な知識と創造性に富み，実践力を身につけた技術者	100	88	80
自己啓発・向上能力に富み，「ものづくり」を通して社会の発展に貢献できる技術者	88	88	70
多様な価値観を理解し，学際的な技術分野で活躍できる技術者	75	94	50
国際社会で活躍できる広い視野と教養をもつ技術者	75	88	50
すべて重要度が高い	(75)	(82)	−

本校では，ディプロマ・ポリシーを満たすために定めている卒業までに達成すべき9つの学習・教育到達目標を定めている。これについて，卒業までに達成すべき9つの学習・教育到達目標の中で重要だと思われる項目を選ぶ設問（複数回答可）で，令和5年度からアンケートを実施している。「すべて重要度が高い」は75 %あり，これを内数とする学習・教育到達目標のアンケート結果を表2−6−4に示す。すべての項目で75 %以上の高いパーセンテージとなっているが，令和5年度より「(C-1)課題探究力:自ら課題を発見し,その本質を理解できること」以外の項目のパーセンテージは低下しているため，今後の動向を注視する必要がある。

表2−6−4　学習・教育到達目標で重要度が高いとした項目のアンケート結果（%）

学習・教育到達目標	R7	R5
(A-1)考察力:地球的視野から物事を多面的に考察できること	75	94
(A-2)倫理観:社会や自然の中での技術の役割を理解し,技術者としての責任を自覚できること	75	94
(A-3)コミュニケーション能力:適切かつ円滑に読解・表現ができること	88	94
(B-1)基礎知識:専門分野の基礎となる内容を理解していること	88	94
(B-2)専門知識:専門分野の内容を理解していること	88	94
(B-3)実践力:実験・実習等の内容を理解・実行・考察できること	88	94
(B-4)学際的知識:様々な分野の知識と技術を理解し,複合的に活用するための視野を持っていること	75	100
(C-1)課題探究力:自ら課題を発見し,その本質を理解できること	100	94
(C-2)課題解決力:身につけた教養と実践力を活用し,課題を解決できること	88	100
すべて重要度が高い	(75)	(88)

準学士課程の学習・教育到達目標に大学の立場から見て，取り入れることが望ましい項目に関するアンケート結果を表2−6−5に示す。複数回答可としているため，結果は母数に対する回答数のパーセンテージで示している。最も高いパーセンテージが「高度なものづくり(設計・製造)技術」の50 %であり，その他の項目についてはあまりパーセンテージが高くないため，今後の動向を注視する必要がある。

表2−6−5　学習・教育到達目標に加えることが望ましい項目のアンケート結果（%）

加えることが望ましい項目	R7	R5
高度な専門の知識・技術	38	6
地球環境問題に対応する知識・技術	13	18
人間科学・生命科学の知識・技術	13	24
地域固有技術	13	6
技術と社会科学を融合させる知識	25	29
起業家育成	25	12
高度なものづくり(設計・製造)技術	50	6
高度なコミュニケーション力	38	6
その他	0	18

【準学士課程卒業生の編入学時に関する設問】

準学士課程卒業生の編入学時の学力，資質・能力に関しての評価に関する調査についてのアンケート結果を表2−6−6に示す。編入学時の学力，資質・能力については，「満足」のパーセンテージが増加し，50 %まで上昇した。「おおむね満足」まで加えると75 %と高いパーセンテージを示している。このままの高いパーセンテージを継続できるか今後の動向を注視したい。

表2−6−6　編入学時の本校卒業生の学力，資質・能力についてのアンケート結果（%）

項目	R7	R5	R3
満足	50	35	20
おおむね満足	25	41	70
普通	13	18	0
やや不満	0	0	0
不満	0	0	0
わからない	13	6	0
その他	―	―	10

【準学士課程卒業生への『数理・データサイエンス･AI(リテラシーレベル)』の教育プログラムについて】

本校では，平成30年度以降に入学する全ての学生に対する『数理・データサイエンス・AI（リテラシーレベル)』の教育プログラムの認定を受けている。令和7年度より，本プログラムの修了生である，入社した準学士課程卒業生の評価（活躍状況など）を調査する。アンケート結果を表2−6−7に示す。「満足」，「おおむね満足」を合わせたパーセンテージが63 %であった。「やや不満」が13 %あることから今後の動向を注視する必要がある。

表2−6−7　『数理・データサイエンス・AI（リテラシーレベル)』の教育プログラムを修了した本校卒業生の評価（活躍状況など）についてのアンケート結果（%）

項目	R7
満足	50
おおむね満足	13
普通	13
やや不満	13
不満	0
わからない	13

『数理・データサイエンス・AI（リテラシーレベル)』の教育プログラムを修了した準学士課程卒業生に関して，ご意見・ご要望等をお聞かせいただいております。貴重な具体的なご意見をいただき，ありがとうございます。この場を借りて御礼申し上げます。ご意見に関しましては，本校運営会議に報告し，今後の準学士課程の議論に活用させていただきます。

＜大学院へ入学した学生（専攻科課程修了生）に対するアンケート結果＞

【本校の教育理念に関する設問】

本校では，「求める人材像」である「教育理念」を定めている。令和5年度より，「教育理念」に関するアンケートを実施した。設問は，教育理念で基盤として掲げている幅広い工学基礎，豊かな教養と創造性，多様性，学際性，国際性に富む技術者，加えて地域と密着した開かれた高専（学外との連携協力）の項目で，大学院の立場から見て，重要度の高い項目を選ぶというアンケートである。「すべて重要度が高い」は0 %あり，これを踏まえて教育理念のアンケート結果を表2−6−8に示す。複数回答可としているため，結果は母数に対する回答数のパーセンテージで示している。「1. 幅広い工学基礎」，「3. 創造性に富む技術者」が100 %で，最も高いパーセンテージであった。一方，「4. 多様性に富む技術者」，「5. 学際性に富む技術者」，「6. 国際性に富む技術者」，「7. （学外との）連携協力」は0 %であり，母数が少ないことを考慮しても今後の動向を注視する必要がある。

表2−6−8　教育理念に掲げる項目で重要度が高いとした項目の結果（%）

教育理念の項目	R7	R5
1. 幅広い工学基礎	100	60
2. 豊かな教養	50	80
3. 創造性に富む技術者	100	100
4. 多様性に富む技術者	0	60
5. 学際性に富む技術者	0	100
6. 国際性に富む技術者	0	100
7.（学外との）連携協力	0	80
8. すべて重要度が高い	(0)	(60)

【専攻科課程のディプロマ・ポリシーについて】

本校では，平成29年度（2017年度）より専攻科課程修了認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）を定めている。令和3年度より，専攻科課程のディプロマ・ポリシーで育成目標として掲げられた3つの資質・素質を持つ技術者のうち，大学院の立場から見て，重要度が高いと思われるものを選択する設問（複数回答可）でアンケートを実施している。「すべて重要度が高い」は50％あり，これを内数とするディプロマ・ポリシーのアンケート結果を表2−6−9に示す。複数回答可としているため，結果は母数に対する回答数のパーセンテージで示している。「物事を多面的に考察できる力，社会における技術者の責任を自覚できる高い倫理観，及び優れたコミュニケーション能力を備えた高度な技術者」以外の項目が100％であった。

表2−6−9　ディプロマ・ポリシーで重要度が高いとした項目のアンケート結果（%）

ディプロマ・ポリシーの育成目標	R7	R5	R3*
物事を多面的に考察できる力，社会における技術者の責任を自覚できる高い倫理観，及び優れたコミュニケーション能力を備えた高度な技術者	50	100	20
工学の基礎知識，工学の専門知識及び高度に融合された学際的知識を有し，実践力に富む高度な技術者	100	100	60
課題の探求能力に優れ，またその課題を解決する方法を提案できる高度な技術者	100	100	20
すべて重要度が高い	(50)	(100)	−

＊：R3年度は複数選択可ではなかった

本校では，専攻科課程のディプロマ・ポリシーを満たすための「専攻科課程修了までに達成すべき9つの学習・教育到達目標」を定めている。これについて，修了までに達成すべき9つの学習・教育到達目標の中で，大学院の立場から見て，重要だと思われる項目を選ぶ設問（複数回答可）で，令和5年度からアンケートを実施している。「すべて重要度が高い」は50％あり，これを内数とするディプロマ・ポリシーのアンケート結果を表2−6−10に示す。「(A-1)多面的考察力：物事を多面的に考察できること」，「(A-3)コミュニケーション能力：日本語及び外国語によるコミュニケーションを適切にできること」，「(B-4)工学の学際的知識：工学の学際的知識を専門知識に活用できる程度に習得すること」，「(C-1)課題探究力：現状を進展させるための課題の探求・理解が自らできること」が50％となっており，今後の動向を注視する必要がある。

表2−6−10　学習・教育到達目標で重要度の高い項目についてのアンケート結果（%）

学習・教育到達目標	R7	R5
(A-1) 多面的考察力：物事を多面的に考察できること	50	100
(A-2) 高い倫理観：技術者としての倫理観を確立できること	100	100
(A-3) コミュニケーション能力：日本語及び外国語によるコミュニケーションを適切にできること	50	100
(B-1) 工学の基礎知識：工学の基礎知識を専門に応用できるまで理解できること	100	100
(B-2) 工学の専門知識：工学の専門知識を深く理解できること	100	100
(B-3) 実践力：実験・実習等を確実に実践できること	100	100
(B-4) 工学の学際的知識：工学の学際的知識を専門知識に活用できる程度に習得すること	50	100
(C-1) 課題探究力：現状を進展させるための課題の探求・理解が自らできること	50	100
(C-2) 課題解決力：様々な問題に対処できるデザイン能力を習得すること	100	100
すべて重要度が高い	(50)	(100)

専攻科課程の学習・教育到達目標に大学院の立場から，取り入れることが望ましい項目に関するアンケート結果を表2−6−11に示す。複数回答可としているため，結果は母数に対する回答数のパーセンテージで示している。年度ごとに回答の傾向が異なっており，今後の動向を注視する必要がある。

表2−6−11　学習・教育到達目標に加えることが望ましい項目のアンケート結果（%）

加えることが望ましい項目	R7	R5
高度な専門の知識・技術	50	0
地球環境問題に対応する知識・技術	0	20
人間科学・生命科学の知識・技術	0	40
地域固有技術	0	0
技術と社会科学を融合させる知識	50	20
起業家育成	0	20
高度なものづくり(設計・製造)技術	100	0
高度なコミュニケーション力	0	60
その他	―	―

【専攻科課程修了生の入学時に関する設問】

専攻科課程修了生の大学院入学時の学力，資質・能力に関しての評価に関する調査についてのアンケート結果を表2−6−12に示す。入学時の学力，資質・能力については，「わからない」を除くとすべて「満足」であり，大学院入学した学生の学力，資質・能力に大きな問題はないと考えられる。

表2−6−12　入社時の本校卒業生の学力，資質・能力についてのアンケート結果（%）

項目	R7	R5	R3
満足	50	60	33
おおむね満足	0	40	66
普通	0	0	0
やや不満	0	0	0
不満	0	0	0
わからない	50	0	0
その他	―	―	0

その他，本校専攻科課程修了生に関して，貴重なご意見・ご要望等を賜りました。貴重な具体的なご意見をいただき，ありがとうございます。この場を借りて御礼申し上げます。ご意見に関しましては，本校運営会議に報告し，今後の専攻科課程の議論に活用させていただきます。

【専攻科課程修了生への『数理・データサイエンス･AI(リテラシーレベル)』の教育プログラムについて】

本校では，平成30年度以降に入学する全ての学生に対する『数理・データサイエンス・AI（リテラシーレベル)』の教育プログラムの認定を受けている。令和7年度より，本プログラムの修了生である，入社した専攻科課程修了生の評価（活躍状況など）を調査する。アンケート結果を表2−6−13に示す。「分からない」を除いた評価されている中でのパーセンテージは「満足」が100％となっている。今年度からのアンケート調査のため，この水準が維持されていくのか，今後の動向を注視する必要がある。

表2−6−13　『数理・データサイエンス・AI（リテラシーレベル)』の教育プログラムを修了した専攻科修了生の評価（活躍状況など）についてのアンケート結果（%）

項目	R7
満足	50
おおむね満足	0
普通	0
やや不満	0
不満	0
わからない	50

２.７　令和 8 年度 準学士課程入学生アンケート

過去3年間に実施した新入生に関するアンケートの実施時期および回答者数等は表2−7−1の通りである。アンケート内容は高専機構の入学動機アンケートを基本としている。今回の分析は，令和8年度における新入生を対象とし，令和7年度および令和6年度にも同様の質問項目がある場合はその値を参照・比較する形で行った。本アンケートは2月の入学試験合格発表日に郵送される合格者への郵送物として配布・実施している。回答率は 98.5 %であった。実施方法については問題無いと思われる。なお，アドミッション・ポリシーに関するアンケートは教務主事室で実施しているため，アドミッション・ポリシーに関する結果・分析に関してはそちらを参照して下さい。

表 2−7−1　新入生保護者および新入生*アンケートの実施状況

	実施時期	対象者数（名）	回答者数（名）	回答率（%）
R6（2024）年度	R6 年 3 月	新入生 207	206	99.5
R7（2025）年度	R7 年 4 月	新入生 207	201	97.1
R8（2026）年度	R8 年 2 月	新入生 202	199	98.5

＊　前年度からの留年者等を除いた学生（新規入学生）を「新入生」と定義して，本アンケートの対象としている。

以下の表において，令和 8 年度のパーセンテージが令和 7 年度から 10 ポイント以上上昇した場合は数値右横に↑，10 %以上下降した場合は数値右横に↓を付した。

【(設問 1）有明高専を最初に知った時期】

表 2−7−2 に有明高専を最初に知った時期に関するアンケートの結果を示す。1 つのみ回答可としており，パーセンテージの高い上位 2 つの項目の数字を網掛けにしている。R8 年度は「中学 2 年」が 32%で最も高く，R7 年度の 24%から 8 ポイント，R6 年度の 20%から 12 ポイント上昇した。一方，「小学 4〜6 年」は 15%で，R7 年度の 26%から 11 ポイント，R6 年度の 23%から 8 ポイント低下している。「中学 1 年」は 24%で前年度とほぼ同水準，「中学 3 年」は 19%で大きな変化はない。このため，R8 年度は小学校高学年での認知が弱まり，中学 2 年で認知する層が増えた構図であり，R7 年度にみられた認知の早期化が継続したとは言い難い。小学校高学年から中学 1 年に向けた接触機会を強化するとともに，中学 2 年で高まる関心を受験検討へつなげる広報設計が必要である。

表 2−7−2　有明高専を最初に知った時期（%）

時期	R8	R7	R6
小学校入学前	3	2	2
小学 1〜3 年	7	8	3
小学 4〜6 年	15↓	26	23
中学 1 年	24	23	31
中学 2 年	32	24	20
中学 3 年	19	17	21

【(設問2）受験検討時期】

表 2−7−3 に受験検討時期に関するアンケートの結果を示す。1 つのみ回答可としており，パーセンテージの高い上位 2 つの項目の数字を網掛けにしている。R8 年度は「中 3」が 49%で最も高く，R7 年度の 46%から 3 ポイント上昇し，R6 年度と同率であった。「中 2」も 31%で，R7 年度の 29%，R6 年度の 27%から緩やかに上昇している。中 2・中 3 の合計は 80%となり，R7 年度の 75%，R6 年度の 76%を上回った一方，小学生から中 1 までの合計は 20%にとどまる。受験検討が中学校後半に一層集中しているため，中学 2 年までに学校の特色や創造工学科・各コースの学びを理解できる情報を届け，中学 3 年には入試情報，進路実績，学校生活など意思決定に直結する情報を重点的に発信することが有効と考えられる。

表 2−7−3　有明高専への受験検討時期（%）

時期	R8	R7	R6
小学 1〜3 年	1	1	0
小学 4〜6 年	5	8	9
中 1	14	16	15
中 2	31	29	27
中 3	49	46	49

【(設問 3) 受験決定時期】

表 2−7−4 に受験決定時期に関するアンケートの結果を示す。1 つのみ回答可としており，パーセンテージの高い上位 2 つの項目の数字を網掛けにしている。 R8 年度は「中 3 第 2 学期」が 36%で最多であるが，「中 3 第 1 学期」も 34%まで上昇し，両者の差は 2 ポイントとなった。「中 3 第 1 学期」は R7 年度の 26%から 8 ポイント，R6 年度の 23%から 11 ポイント上昇した一方，「中 3 第 2 学期」は R7 年度から 3 ポイント，R6 年度から 4 ポイント低下している。中 3 第 1・第 2 学期の合計は 70%で，R7 年度の 65%，R6 年度の 63%を上回っており，決定時期が中 3 第 1 学期側へ前倒しされた傾向がみられる。したがって，体験入学，学校説明会，Web 情報等の主要な広報施策は中学 3 年の夏休み以前に十分展開し，早期の意思決定を支援することが重要である。

表 2−7−4　有明高専受験を決定した時期（%）

時期	R8	R7	R6
小学校	2	3	2
中 1	4	8	8
中 2 前半	6	6	7
中 2 後半	16	15	16
中 3 第 1 学期	34	26	23
中 3 第 2 学期	36	39	40
中 3 第 3 学期	2	3	3

【(設問 4) 関心を持ったきっかけ】

表2−7−5に関心を持ったきっかけに関するアンケート結果を示す。3つまでを回答可とし，結果は母数に対する回答数のパーセンテージで示し，パーセンテージの高い上位2つの項目の数字を網掛けにしている。R8年度の上位は「オープンキャンパス・見学会」56%,「体験入学」30%であった。「オープンキャンパス・見学会」はR6年度・R7年度に続き3年連続で最上位を維持しており，本校への関心を高める最も影響力の高い機会となっている。また,「体験入学」は前年度の21%から9ポイント増加して第2位となったほか,「ロボコン・デザコン・プロコン・プレコン」（19%）や「中学校における説明会」（16%）も着実な増加傾向を示している。

一方で，R7年度まで上位であった「学校行事（高専祭・体育祭等)」は32%から6%へと26ポイント低下したほか,「ホームページ」（28%→16%）や「パンフレット」（22%→13%）などの広報媒体も減少した。ただし，R8年度は本設問の選択肢数が「3つまで選択」（R6・R7年度は「5つまで選択」）へと制限されたことが，サブ的なきっかけ項目の選択率低下に影響したと考えられる。加えて，R8年度から「入学説明会」「体験入学」「オープンキャンパス・見学会」の3項目については，志望動機への影響度を尋ねた別設問において「とても影響した」と回答した割合を抽出して反映させている。このように集計定義や選択数上限といった設問形式の年度差が存在するため，そのまま実態の増減として直接比較することには留意が必要である。

表 2−7−5　関心を持ったきっかけ（%）

項目	R8	R7	R6
入学説明会（本校主催）	2↓	13	16
体験入学	30	21	20
オープンキャンパス・見学会	56	64	56
学校行事（高専祭・体育祭等）	6↓	32	23
高専体育大会	6	3	2
ロボコン・デザコン・プロコン・プレコン	19	18	14
GCON，高専女子フォーラム	2	1	0
公開講座	1	1	1
出前授業・訪問実験	1	3	1
地域イベントなどでの科学体験教室	4	5	5
パンフレット	13	22	29
ホームページ	16↓	28	32
中学校における説明会	16	12	8
国公私立高専合同説明会	2	2	0
新聞･雑誌･高専に関する漫画などの情報紙(誌)	3	1	3
TV・ラジオ	2	2	1
動画サイト，SNS など	6	7	8
進学情報サイトなど	4	10	6
その他	0	3	2

【(設問 5) 志願に影響を受けた方やアドバイスを受けた方】

表 2−7−6 に志願に影響を受けた方・アドバイスを受けた方に関するアンケート結果を示す。1 つのみ回答可としており，パーセンテージの高い上位 2 つの項目の数字を網掛けにしている。R8 年度も「保護者」が 47%で突出しており，R7 年度 46%，R6 年度 43%とほぼ同水準である。「先輩・友人」は 18%で，R7 年度の 11%から 7 ポイント，R6 年度の 8%から 10 ポイント上昇し，人的な口コミの影響が明確に強まった。一方，中学校等在籍する学校の先生からのすすめは 4%で，R7 年度から 4 ポイント，R6 年度から 7 ポイント低下している。塾の先生は 10%で前年度と同率である。保護者向けの情報提供を引き続き重視しつつ，在学生・卒業生や友人を介して学校の実像が伝わる仕組みを充実させることが有効である。

表 2−7−6　志願に影響を受けた方・アドバイスを受けた方（%）

項目	R8	R7	R6
保護者	47	46	43
兄弟／姉妹	10	12	12
親戚	4	4	4
中学校等在籍する学校の先生からのすすめ	4	8	11
先輩，友人	18	11	8
塾の先生	10	10	15
特にアドバイスは受けていない	7	9	6
その他	0	0	0

【(設問 6) 本校への志望を決めた理由】

表2−7−7に本校に志望を決めた理由に関するアンケート結果を示す。5つまでを回答可とし，結果は母数に対する回答数のパーセンテージで示し，パーセンテージの高い上位2つの項目の数字を網掛けにしている。R8年度は「自分の学びたいことを学べる」が48%で最多，次いで「就職の実績がよい」21%，「校風が自分に合っている」9%であった。上位2項目はR7年度からそれぞれ8〜9ポイント低下し，「特色のある授業・カリキュラム」は20%から7%，「施設・設備」は19%から4%，「海外留学・国際交流」は15%から2%へ低下している。

しかし，R8年度は1つのみ選択する形式であるのに対し，R7年度・R6年度は5つまで選択する形式であり，個々の項目の低下は主として回答方式の違いの影響を受ける。したがって単純な増減評価ではなく，約半数が学びの内容を選び，次に就職実績が続いたことを重視すべきである。今後は，学びたい内容と特色あるカリキュラム，就職・進学実績とのつながりを具体的な事例や卒業後の進路で示すことが望ましい。

表 2−7−7　本校への志望を決めた理由（%）

項目	R8	R7	R6
自分の学びたいことを学べる	48	56	81
特色のある授業，カリキュラムがある	7↓	20	31
就職の実績がよい	21	30	48
大学への進学実績がよい	2	8	13
専攻科課程に進学し，学士の学位を取得することができる	1	7	9
とりたい資格がとれる	2	11	17
この人に学びたいと思う教員がいる	1	0	1
寮がある	1	7	5
立地，通学環境がよい	0	3	2
施設や設備が充実している	4↓	19	23
校風が自分に合っている	9↓	23	18
両親，先生，友人から勧められた	1↓	12	17
学費があまりかからない（学費が安い，独自の奨学金がある）	0	5	7
入りたい部活動があるなど，課外活動に興味がある（ロボコン等含む）	0	7	6
海外留学，国際交流の機会がある	2↓	15	18
偏差値がちょうどよかった	1	6	3
なんとなく	0	0	0
その他	0	8	0

【(設問 7) 入学前に感じていた魅力】

表 2−7−8 に入学前に感じていた魅力に関するアンケートの結果を示す。3 つまでを回答可とし，結果は母数に対する回答数のパーセンテージで示し，パーセンテージの高い上位 2 つの項目（同率がある場合は 3 つの項目）の数字を網掛けにしている。R8 年度は「就職の実績」が 44%で最も高く，次いで「早期専門教育」が 21%,「将来の夢の実現」が 20%であった。「就職の実績」は，回答選択数が制限された中（R6・R7 年度の「5 つまで選択」から「3 つまで選択」へ変更）でも高い水準を維持しており，本校の最も魅力的な要素であることが示されている。

一方で,「早期専門教育」(68%→21%) をはじめ,「特色のある授業・カリキュラム」(50%→8%) や「5 年一貫教育」(50%→6%) といった制度的な項目は，選択枠の減少に伴い数値が大きく低下した。これは選択肢が絞られたことで，回答者の重視するポイントが「制度そのもの」から「就職」や「早期専門教育」「将来の夢の実現」といった直感的かつ具体的な成果・目的に集約された結果と考えられる。

表 2−7−8　入学前に感じていた魅力（%）

項目	R8	R7	R6
特色のある授業・カリキュラム	8↓	50	41
5 年一貫教育	6↓	50	42
早期専門教育	21↓	68	72
就職の実績	44	49	55
大学進学実績	3↓	14	17
専攻科	1	10	9
JABEE 認定	1	0	1
資格取得	4	13	18
教員	1	0	1
寮	3	7	4
立地・通学環境	0	3	2
施設・設備	6↓	23	25
校風	5↓	24	18
学費	5	6	5
ロボコン・デザコン・プロコン・プレコン	2↓	12	12
GCON，高専女子フォーラム	1	0	0
課外活動	1	8	5
学校行事（高専祭・体育祭等）	7↓	19	12
将来の夢の実現	20↓	40	45
学びたいことを学べる	14↓	42	46
海外留学・国際交流	13	19	21
その他	0	1	0

【(設問 8) 入学前に知りたかったこと】

表 2−7−9 に入学前に知りたかったことに関するアンケートの結果を示す。3 つまでを回答可とし，結果は母数に対する回答数のパーセンテージで示し，パーセンテージの高い上位 2 つの項目（同率がある場合は 3 つの項目）の数字を網掛けにしている。R8 年度は「授業」が 35%で最も高く，次いで「学則」が 27%となり，上位 2 項目となった。また，第 3 位の「留年・退学」(22%) を含めた上位 3 項目は，R6 年度および R7 年度から 3 年連続でトップ 3 を占めており，入学前の情報ニーズが特定の項目に集中していることが窺える。

特に「授業」については，選択上限数が制限された中（R6・R7 年度の「5 つまで選択」から「3 つまで選択」へ変更）であっても，前年度 (34%) と同水準の 35%を維持して単独首位となった。一方で,「進路（進学)」(3%) や「進路（就職)」(4%),「学費」(6%) といった項目は低位にとどまっている。これは，進路や学費等の基本情報については事前の広報等で概ね把握できているのに対し，入学後の「授業内容・課題量」「単位取得・進級基準（学則)」「留年・退学のリスク」といった実態的な学修生活に対する不安や関心が格段に高いことを示している。

設問形式の変更（選択数制限）により全体的な数値は低下傾向にあるものの，修学や進級要件に関する具体的情報へのニーズの高さは一貫している。今後は，FAQ の充実や Web 動画，説明会資料等を通じて，授業の進め方，評価基準，課題量，進級要件などの学修生活を具体的に可視化し，入学前の不安解消と満足度の更なる向上につなげる必要がある。

表 2−7−9　入学前に知りたかったこと（%）

項目	R8	R7	R6
高校との違い	10	15	15
進路（進学)	3	10	16
進路（就職）	4	11	14
学費	6	6	10
学則	27	33	53
授業	35	34	51
インターンシップ	11	13	12
国際交流	13	18	17
寮	13	17	25
課外活動	13↓	24	29
留年・退学	22↓	33	32
知りたかったことは知ることができた（満足）	0	1	10
その他	0	0	0

【(設問 9)「『高専』という選択」を読んだことがあるか】

表 2−7−10 に高専機構が作成した冊子「『高専』という選択」を読んだことがあるかの有無に関するアンケートの結果を示す。R8 年度の「読んだことがある」は 26%で，R7 年度の 18%から 8 ポイント上昇し，R6 年度と同率まで回復した。ただし，未読・認知なしは依然として 74%を占めており，冊子の到達度は十分とはいえない。配布時期・配布場所を見直すとともに，学校ホームページ，入試案内，説明会資料からデジタル版へ直接アクセスできる QR コード等を設け，冊子を読む行動につながる導線を強化する必要がある。

表 2−7−10　「『高専』という選択」を読んだことがあるか（%）

	R8	R7	R6
読んだ（読んだことがある）	26	18	26
読んでいない(読んだことはない, 知らない)	74	82	74

【(設問 10)「キラキラ高専ガールになろう！」を読んだことがあるか】

表 2−7−11 に高専機構が作成した冊子「キラキラ高専ガールになろう！」を読んだことがあるかの有無に関するアンケートの結果を示す。R8 年度の「読んだことがある」は 19%で，R7 年度の 5%から 14 ポイント，R6 年度の 3%から 16 ポイント上昇し，大幅な改善がみられた。一方，未読・認知なしは 81%であり，認知度はなお低い。R8 年度の増加要因として，冊子名の変更・併記，配布方法，女子向け広報との連携等が考えられるが，本アンケートのみでは要因を特定できない。配布経路別の到達状況を確認し，女子中学生だけでなく保護者や中学校教員にも内容を周知するとともに, Web・SNS・説明会で継続的に紹介することが望まれる。

表 2−7−11　「キラキラ高専ガールになろう！」を読んだことがあるか（%）

	R8	R7	R6
読んだ（読んだことがある）	19↑	5	3
読んでいない(読んだことはない, 知らない)	81↓	95	97

２.８　令和 8 年度の 4 年次編入生アンケート

過去3年間に実施した4年次編入生に関するアンケートの実施時期および回答者数等は表2−8−1の通りである。令和4年度に新たに設けたアンケートで，アンケート内容は高専機構の入学動機アンケートを基本としている。本アンケートは3月の編入学生説明会の際にMicrosoft Formsアドレスを配布した。回答率は100%であった。今後もMicrosoft Formsでの実施は問題無いと思われる。なお，令和7 (2025)年度は，編入学生がいなかったためアンケートは実施していない。そのため，令和8年度と令和6年度，令和5年度を比較することとした。

表 2−8−1　4 年次編入生アンケートの実施状況

	実施時期	対象者数（名）	回答者数（名）	回答率（%）
R5（2023）年度	R5 年 3 月	4	4	100
R6（2024）年度	R6 年 3 月	5	5	100
R8（2026）年度	R8 年 3 月	4	4	100

【(設問 1）所属コース】

エネルギー 2 名，応用化学 0 名，環境生命 1 名，メカニクス 0 名，情報システム 1 名，建築 0 名であった。4 名へのアンケートであることから一人のアンケート回答でパーセンテージが大きく変動することに留意する必要がある。

【(設問 2）有明高専を最初に知った時期】

表 2−8−2 に有明高専を最初に知った時期に関するアンケートの結果を示す。1 つのみ回答可とし，パーセンテージの最も高い項目の数字を網掛けにしている。最初に知った時期で最も多い時期は中学校の時期という結果で，3 年間同じであった。

表 2−8−2　有明高専を最初に知った時期（%）

時期	R8	R6	R5
小学校入学前	25	0	0
小学生の時期	0	20	0
中学校の時期	50	40	50
高等学校 1 年生の頃	0	20	0
高等学校 2 年生の頃	25	20	25
高等学校 3 年生の頃	0	0	25
その他	0	0	0

【(設問 3）受験検討時期】

表 2−8−3 に受験検討時期に関するアンケートの結果を示す。1 つのみ回答可とし，パーセンテージの最も高い項目の数字を網掛けにしている。R8 年度では「高等学校 1 年生の頃」が最も多い回答であったが，編入学年度により傾向がバラバラなため，傾向に関しては判断ができないところである。今後の動向を注視し，広報活動に活かしてほしい。

表 2−8−3　有明高専への受験検討時期（%）

時期	R8	R6	R5
高等学校 1 年生の頃	50	20	50
高等学校 2 年生の頃	25	60	0
高等学校 3 年生の頃	25	20	50
その他	0	0	0

【(設問 4）受験決定時期】

表 2−8−4 に受験決定時期に関するアンケートの結果を示す。1 つのみ回答可とし，パーセンテージの最も高い項目の数字を網掛けにしている。R8 年度では，高等学校 2 年生の 1 学期・2 学期，高等学校 3 年生の 1 学期前半・後半にばらける回答であった。R5，R6，R8 年度を通して結果にばらつきがあり，受験決定時期の傾向の分析は難しいため今後の動向を注視していく必要がある。

表 2−8−4　有明高専受験を決定した時期（%）

時期	R8	R7	R6
高等学校 1 年生の頃	0	20	50
高等学校 2 年生の 1 学期	25	0	0
高等学校 2 年生の 2 学期	25	20	0
高等学校 2 年生の 3 学期	0	40	25
高等学校 3 年生の 1 学期前半	25	20	0
高等学校 3 年生の 1 学期後半	25	0	25
その他	0	0	0

【(設問 5) 関心を持ったきっかけ】

表 2−8−5 に関心を持ったきっかけに関するアンケート結果を示す。5 つまでを回答可とし，結果は母数に対する回答数のパーセンテージで示し，パーセンテージの最も高い項目の数字を網掛けにしている。 3 年間を通して割合の高い回答項目は「高等学校の先生からのすすめ」であり，「体験入学」や「学校のホームページ」もいずれの年度でも回答のある項目であることから，これらに関しては，今後の動向を注視するとともに，広報活動に活かしてほしい。

表 2−8−5　関心を持ったきっかけ（%）

項目	R8	R6	R5
入学説明会（本校主催）	25	0	0
体験入学	25	20	25
オープンキャンパス・見学会	50	0	25
学校行事（ありタムフェスタなど）	25	20	0
高専体育大会	0	20	0
ロボコン・デザコン・プロコン・プレコン	0	0	0
GCON・高専女子フォーラム	0	0	0
公開講座	0	0	0
出前授業・訪問実験	0	0	0
地域イベントなどでの科学体験教室	25	0	0
学校のパンフレット	0	0	25
学校のホームページ	25	20	25
高等学校における説明会	0	0	0
国公私立高専合同説明会（高専機構主催）	0	0	0
新聞・雑誌・高専に関する漫画などの情報紙（誌）	0	0	0
テレビ・ラジオ	0	0	0
動画公開サイト（YouTube など），SNS	0	0	25
インターネットの進学情報サイトやニュース記事	25	0	0
家族・親族からのすすめ	25	20	0
高等学校の先生からのすすめ	50	40	50
先輩，友人からのすすめ	25	0	0
塾の先生からのすすめ	0	0	0
その他	25	0	0

【(設問 6) 本校への志望を決めた理由】(複数回答可)

表 2−8−6 に志望を決めた理由に関するアンケート結果を示す。5 つまでを回答可とし，結果は母数に対する回答数のパーセンテージで示し，パーセンテージの最も高い項目の数字を網掛けにしている。いずれの年度も「自分の学びたいことが学べる」が最も多い結果となった。また，3 年間，上位の回答として「就職実績が良い」がある。両項目は，毎年，高い回答率で推移しており，広報活動に活かしてほしい。また，3 年間で回答のある項目に関しては，今後の動向を注視が必要である。過去にパーセンテージが高い傾向にあった「就職の実績がよい」「家族，親戚，友人，高等学校や塾の先生からのすすめがあった」が R8 年度はゼロとなり，R6 でゼロとなっていた「特色ある授業・カリキュラム」が R8 年度では高い割合を示している。

表 2−8−6　本校への志望を決めた理由（%）

項目	R8	R6	R5
自分の学びたいことが学べる	100	80	75
特色のある授業・カリキュラム	75	0	25
就職の実績がよい	0	60	25
大学への進学実績がよい	25	20	50
専攻科課程へ進学し，学士の学位を取得することができる	25	0	0
とりたい資格が取れる	25	0	25
この人に学びたいと思う教員がいる	25	0	0
寮がある	0	20	0
立地，通学環境がよい	0	0	25
施設や設備が充実している	25	0	0
校風が自分に合っている	0	0	0
家族，親戚からのすすめがあった	0	40	25
先輩，友人からのすすめがあった			17
高等学校の先生からのすすめがあった			25
塾の先生からのすすめがあった			8
学費があまりかからない	0	40	0
入りたい部活動があるなど，課外活動に興味がある	0	0	0
海外留学，国際交流の機会がある	0	0	0
偏差値がちょうどよかった	0	0	0
なんとなく	0	0	0
その他	0	0	0

【(設問 7) 受験を決めるにあたって，最も影響を受けた方やアドバイスを受けた方】

表 2−8−7 に本校への受験を決めるにあたって，最も影響を受けた方やアドバイスを受けた方に関するアンケート結果を示す。1 つのみ回答可としており，パーセンテージの最も高い項目の数字を網掛けにしている。R5 年度から導入された項目である。R5 年度，R6 年度と同様に「高等学校等在籍する学校の先生からのすすめ」が最上位の回答であった。

表 2−8−7 受験の決定に最も影響を受けた方やアドバイスを受けた方（%）

項目	R8	R6	R5
保護者	25	0	0
兄弟／姉妹	0	20	0
親戚	0	20	0
高等学校等在籍する学校の先生からのすすめ	50	40	75
先輩，友人	0	0	25
塾の先生	25	20	0
特にアドバイスは受けていない	0	0	0
その他	0	0	0

【(設問 8) 入学前に感じていた魅力】

表 2−8−8 に入学前に感じていた魅力に関するアンケート結果を示す。5 つまでを回答可とし，結果は母数に対する回答数のパーセンテージで示し，パーセンテージの最も高い項目の数字を網掛けにしている。R8 年度は「特色のある授業・カリキュラム」が最も割合の高い回答であった。この結果は，「(設問 6) 本校への志望を決めた理由」の回答割合の傾向と一致する。また，「早い時期からの専門教育」の割合も増加傾向にあり，本校の教育システムやカリキュラムが本校の魅力や志望理由の要因になっていると思われる。一方，これまで割合が高かった回答項目として「就職実績が良い」や「大学への進学実績がよい」があったが，R8 年度はゼロになっている。残りの項目は分散しており，今後の動向を注視するとともに，広報活動に活かしてほしい。

表 2−8−8　入学前に感じていた魅力（%）

項目	R8	R7	R6
特色のある授業・カリキュラム	75	20	25
理工系の 5 年一貫教育	25	0	50
早い時期からの専門教育	75	40	25
就職の実績がよい	0	80	50
大学への進学実績がよい	0	40	75
専攻科課程に進学し学士の学位を取得できる	50	0	0
とりたい資格が取れる	25	0	25
この人に学びたいと思う教員がいる	25	0	0
寮がある	0	0	0
立地・通学環境がよい	0	0	25
施設や設備が充実している	25	40	0
校風が自分に合っている	25	0	0
両親・先生・友人から勧められた	0	20	0
学費があまりかからない	0	60	0
ロボコン・デザコン・プロコン・プレコン	0	0	0
GCON，高専女子フォーラム	0	0	0
入りたい部活動がある（課外活動への興味）	0	0	0
学校行事（ありタムフェスタ）に興味がある	0	0	0
将来の夢を実現できると思った	50	40	50
自分の学びたいことが学べる	50	0	50
海外留学・国際交流の機会がある	0	0	0
その他	0	0	0

【(設問 9) 入学前に知りたかったこと】

表 2−8−9 に入学前に知りたかったことに関するアンケートの結果を示す。5 つまでを回答可とし，結果は母数に対する回答数のパーセンテージで示し，パーセンテージの最も高い項目の数字を網掛けにしている。3 年連続で「授業について（時間割，授業科目，実験・実習，課題)」が高いパーセンテージを示した。また，入学前に知りたかったこととして「インターンシップについて」の割合が増加傾向にある。残りの項目は分散しており，いずれの年度も回答のある項目に関しては，今後の動向を注視するとともに，広報活動に活かしてほしい。

表 2−8−9 入学前に知りたかったこと（%）

項目	R8	R6	R5
大学（短期大学）との違いについて	0	20	25
進路（進学率，進学先）について	0	40	75
進路（就職率，就職先）について	0	20	50
学費について（奨学金や学費の減額・免除の制度）	0	0	0
学則について	50	0	50
授業について（時間割，授業科目，実験・実習，課題）	75	80	50
インターンシップについて	75	40	25
国際交流活動について（留学制度，外国人学生の受入れ）	0	0	0
寮について（寮の規則，寮の費用，雰囲気など）	0	40	0
課外活動について（部活動の種類，土日の活動）	0	20	25
留年，退学について	25	20	25
知りたかったことは知ることができていた	25	20	0
その他	0	0	0

【(設問 10) アドミッション・ポリシーについて】

表 2−8−10 に「アドミッション・ポリシーを知っているか」に関するアンケート結果を示す。1 つのみ回答可としている。R8 年度は 100%が「知っている」と回答した。これまで，認知度は高いパーセンテージでかつ増加傾向で推移していたが，今年度は全員が AP を認知している結果となった。

表 2−8−10 アドミッション・ポリシーを知っているか（%）

項目	R8	R6	R5
知っている	100	80	75
知らない	0	20	25

【(設問 11）アドミッション・ポリシーについて】

表 2−8−11 にアドミッション・ポリシーを知っている編入生に対する自己評価に関するアンケート結果を示す。複数回答可（すべてを満たす場合は全てに印を付す）としており，結果は母数に対する回答数のパーセンテージで示している。R5 年度に対して R6 年度では全項目で 50%以上の高い割合になったが，R8 年度ではほとんどの項目が 100 %であり，アドミッション・ポリシーに対して非常に高い満足度が得られている結果になった。今後も継続して状況を注視していく必要がある。

表 2−8−11 アドミッション・ポリシーを満足しているかの自己評価（%）

項目	R8	R6	R5
ものづくりに興味がある人	100	75	33
チャレンジ精神がある人	75	75	33
他の人と協力して作業ができる人	100	50	67
物事を粘り強くやり続けることができる人	100	100	67
社会に貢献したいと考えている人	100	50	33

２.９　令和 8 年度の専攻科課程入学生アンケート

過去 3 年間に実施した専攻科課程入学生に関するアンケートの実施時期および回答者数等は表 2−9−1 の通りである。令和 4 年度から設けたアンケートで，アンケート内容は高専機構の入学動機アンケートを基本としている。本アンケートは 4 月に案内メールで依頼し，4 月 27 日までに Microsoft Forms を用いて実施している。回答率は 100 %であった。実施方法については問題無いと思われる。

表 2−9−1　専攻科課程入学生アンケートの実施状況

	実施時期	対象者数（名）	回答者数（名）	回答率（ % ）
R6（2024）年度	R6 年 3 月	26	21	81
R7（2025）年度	R7 年 4 月	23	19	83
R8（2026）年度	R8 年 4 月	19	19	100

教育システムに関する分析として，令和 8 年度と令和 7 年度，令和 6 年度とを比較等することとした。以下の表において，令和 8 年度のパーセンテージが令和 7 年度から 10 ポイント以上上昇した場合は数値右横に↑，10 %以上下降した場合は数値右横に↓を付した。

【(設問 1）有明高専専攻科を最初に知った時期】

表 2−9−2 に有明高専専攻科を最初に知った時期に関するアンケートの結果を示す。1 つのみ回答可としている。パーセンテージの最も高い項目の数字を網掛けにしている。令和 8 年度は「高専 1〜3 年」が 53%となり，令和 7 年度の 37%から大きく増加した一方，「中学生の時期」は 58%から 47%へ減少した。令和 6 年度からの推移をみても，専攻科の認知時期が中学生段階から在学中へ移行する傾向がみられる。これは低学年時からの進路ガイダンスや専攻科紹介の効果が反映された可能性がある。一方で，中学生段階での認知割合は依然として高い水準を維持しているため，本科募集と連動した専攻科情報発信も継続的に重要である。今後は本科 1〜3 年生を対象とした広報活動をさらに充実させることで，早期からの進学意識形成につながることが期待される。

表 2−9−2　有明高専専攻科を最初に知った時期（%）

時期	R8	R7	R6
小学校入学前	0	0	0
小学生の時期	0	0	10
中学生の時期	47↓	58	52
高専 1〜3 年	53↑	37	29
高専 4〜5 年	0	5	10

【(設問2）受験検討時期】

表 2−9−3 に受験検討時期に関するアンケートの結果を示す。1 つのみ回答可としている。パーセンテージの最も高い項目の数字を網掛けにしている。令和 8 年度も「高専 4〜5 年」が 79%で最も高く，令和 7 年度の 74%，令和 6 年度の 57%から上昇傾向が続いている。一方で「高専 2 年後期〜3 年」は 26%から 16%へ低下しており，受験検討の時期が上級学年へ集約されつつあることがうかがえる。学生は専門分野や進路希望が具体化する高学年段階で専攻科進学を検討する傾向が強まっていると考えられる。専攻科への進学検討を早期化するためには，コース配属前後の学生に対する情報提供やキャリア形成支援の充実が有効と考えられる。

表 2−9−3　有明高専専攻科への受験検討時期（%）

時期	R8	R7	R6
高専 1〜2 年前期	5	0↓	19
高専 2 年後期〜3 年	16↓	26	24
高専 4〜5 年	79	74↑	57
その他	0	0	0

【(設問 3）受験決定時期】

表 2−9−4 に受験決定時期に関するアンケートの結果を示す。1 つのみ回答可としている。パーセンテージの最も高い項目の数字を網掛けにしている。受験決定時期では「高専 4 年後期」が 42%で引き続き最多となったが，「高専 5 年前期」は 37%から 26%へ減少した。一方，「高専 2 年後期〜3 年」および「高専 4 年前期」は増加しており，一部では進路決定の早期化もみられる。令和 6 年度と比較すると，依然として 4 年後期以降に決定する学生が多数を占めるものの，意思決定時期の分散化が進んでいる。今後は進路選択の各段階に

応じた情報提供を行い，学生が十分な情報をもって受験判断できる環境整備が重要である。

表 2–9–4　有明高専専攻科受験を決定した時期（%）

時期	R8	R7	R6
高専 1〜2 年前期	0	0	5
高専 2 年後期〜3 年	11	5	5
高専 4 年前期	16	16↓	43
高専 4 年後期	42	42	38
高専 5 年前期	26↓	37↑	5
高専 5 年後期	5	0	5
その他	0	0	0

【(設問 4) 入学の動機（本校の魅力)】

表 2–9–5 に入学の動機に関するアンケートの結果を示す。5 つまでを回答可としており，結果は母数に対する回答数のパーセンテージで示し，パーセンテージの高い項目上位 3 つの項目の数字を網掛けにしている。令和 8 年度の入学動機では「学費があまりかからない」(58%)，「専門教育が充実している」(53%)，「学士の学位を取得できる」(53%) が上位を占めた。特に「学士の学位取得」と「特色のある授業・カリキュラム」は令和 7 年度から大きく増加しており，専攻科の教育的価値がより強く認識されていることがうかがえる。一方，「大学院への進学実績がよい」は 63%から 26%へ大幅に低下しており，進学実績よりも学修内容や経済的メリットを重視する傾向への変化がみられる。今後は専門教育の充実，学位取得，経済的負担の少なさを重点的に広報しつつ，大学院進学実績についても魅力を再発信することが望まれる。

表 2–9–5　入学の動機（本校の魅力）(%)

項目	R8	R7	R6
特色のある授業・カリキュラムがある	37↑	26↑	14
知的欲求が満足できる	11	11	10
専門教育が充実している	53↑	42	48
就職の実績がよい	26	32	38
大学院への進学実績がよい	26↓	63↑	42
学士の学位取得を取得できる	53↑	37↓	62
とりたい資格を取得することができる	5	5	10
この人に学びたいという教員がいる	16↑	5	14
立地・通学環境がよい	16↑	5↓	33
施設・設備が充実している	11↑	0	5
学費があまりかからない	58	53↑	33
将来の夢を実現できると思った	16	11	5
自分の学びたいことが学べる	11	11	5
海外留学・国際交流の機会がある	26↑	16	19
家族・親戚のすすめがあった	16↑	0	10
教員からのすすめがあった	11	5	5
先輩・友人からのすすめがあった	5	11	5
特になし	0	0	0

【(設問 5) アドミッション・ポリシーについて】

表 2–9–6 に「アドミッション・ポリシーを知っているか」に関するアンケート結果を示す。令和 8 年度の「知っている」は 89%で，令和 7 年度と同水準を維持したものの，令和 6 年度の 100%には達していない。入学者の大多数はアドミッション・ポリシーを認識しているが，約 1 割が認識していない状況が継続している。専攻科の求める学生像への理解を深める観点から，募集要項やオリエンテーション等を通じた周知を継続し，100%に近づける取り組みが必要である。

表 2–9–6　アドミッション・ポリシーを知っているか（%）

項目	R8	R7	R6
知っている	89	89↓	100
知らない	11	11	0

【(設問 6) アドミッション・ポリシーについて】

表 2–9–7 にアドミッション・ポリシーを知っている人のうちの自己評価に関するアンケート結果を示す。5 つまでを回答可としており，パーセンテージが 60 %以上の項目の数字を網掛けにしている。令和 8 年度は「幅広い工学に関する基礎知識と主体性」が 68%，「専門工学に関する知識と創造性」が 63%，「自己啓発・向上能力」が 63%となり，複数項目で 60%を超えている。一方で「多様な価値観を理解し学際的な分野で活躍できる人」は 79%から 53%へ，「国際社会で活躍できる広い視野と教養を備えた人」は 53%から 32%へ低下した。国際性や学際性に対する自己評価は近年低下傾向にあり，専攻科教育の中で異分野連携や国際交流の機会をさらに可視化する必要がある。総じて専門性に関する自己評価は維持されている一方，幅広い視野の育成が今後の課題として示唆される。

表 2–9–7　アドミッション・ポリシーを満足しているかの自己評価（%）

	R8	R7	R6
幅広い工学に関する基礎知識と主体性を身につけた人	68 ↓	84↑	71
専門工学に関する知識と創造性に富み，実践力を身につけた人	63	58↓	71
自己啓発・向上能力に富み，技術を通じ社会の発展に寄与できる人	63 ↑	53↓	85
多様な価値観を理解し，学際的な分野で活躍できる人	53 ↓	79	81
国際社会で活躍できる広い視野と教養を備えた人	32 ↓	53	57

３．あとがき

本校の教育システムならびに教育プログラムを継続的に改善・向上するために，本委員会が主体となってアンケートを実施し，集計・分析，報告活動を展開してきました。本調査報告書は，令和 5 年度に本委員会で実施した準学士課程卒業時学生，専攻科課程修了時学生，準学士課程既卒業生・専攻科課程既修了生，主な就職先・進学先，入学生（準学士課程入学生，準学士課程 4 年次編入学学生，専攻科課程入学生）に対するものです。 本調査報告書が，本校における教育プログラムの PDCA の一助として活用していただけますと幸いです。

１．令和 7 年度 準学士課程の卒業時アンケート

令和 7 年度のアンケート回答率は 91 %であり，アンケート方法には問題がある状況ではないと考えられる。なお，令和 6 年度までは 6 コース毎で集計していたが，令和 8 年度からは全コース合計のパーセンテージで分析を進めている。

「教育全般（教育内容・教育環境）」に関する満足度調査では「満足している」,「おおむね満足している」が 90 %以上と高く，問題ない状況と考えられる。

教育における学力，資質・能力についての成果，達成度もいずれも高く，問題ない状況と考えられる。

「学習・教育到達目標」にする設問では，全ての学習・教育到達目標で「身に付いたと思う」,「おおむね身に付いたと思う」が 90 %以上と高く，問題ない状況と考えられる。

「求める人材像」である「教育理念」の認知度調査では，「知っていた」と「おおむね知っていた」が 90 %手前で足踏みしている状況であり，周知徹底を図る必要があると考えられる。

「シラバス」の利用度調査では，「利用した」,「それなりに利用した」が 90 %以上と高く，問題ない状況と考えられる。

数理・データサイエンス・ＡＩ教育プログラムの認知度は 75 %と年を追うごとに上昇している。達成度は 91 %と問題ない状況と考えられるが，プログラム認知度との乖離に関して，今後の状況を注視する必要がある。

その他の設問では，「TOEIC の学習支援」を除き，90%を越えており良好な状態と考えられる。「TOEIC の学習支援」は，毎年 80 %以下でそれを踏襲する形となっており，今後の動向を注視する必要がある。

２．令和 7 年度，専攻科課程修了時アンケート

令和 7 年度のアンケート回答率は 96 %であり，アンケート方法には問題がある状況ではないと考えられる。なお，令和 6 年度までは生産情報システム専攻の 3 コース，応用物質工学専攻，建築学専攻で集計していたが，令和 8 年度からは全専攻合計のパーセンテージで分析を進めている。

「教育全般（教育内容・教育環境）」に関する満足度調査では「満足している」,「おおむね満足している」が「ICT 環境」を除いて，90 %以上と高く，問題ない状況と考えられる。「ICT 環境」は 84 %であり，令和 5 年度から 10 %以上低下しており，今後の状況を注視する必要がある。

教育における学力，資質・能力についての成果，達成度調査は「良かった」,「おおむね良かった」が，90 %以上と高く，問題ない状況と考えられる。

「学習・教育到達目標」にする設問では，専攻科課程修了生全体（黒）の回答結果から，60 %を越えているものは，重要度では「A1（69 %）」「C1（61 %）」で，B1，B2，B3 が 50%を超えている。満足度では 50%を越えているものがなく，最も高いものでも「B2（42 %）」で，50%を越える項目が複数あった R5 年度に比べいずれも低くなっていた。専攻科生は，多面的考察力，課題探究力および自らの専門分野の能力を重要視している一方，満足度が低いことがわかる。

「育成する人材像」である「教育理念」や修了要件，評価基準の認知度調査の結果，いずれも 96%以上と高く，十分に周知できているといえる。

その他の設問では，概ね 90%を越えており良好な状態と考えられる。90 %未満の回答は，「シラバス活用」が 88 %,「時間外学習」が 88 %,「図書館の活用」が 84 %,「TOEIC の学習支援」が 80 %,「TOEIC の取り組み」が 72 %である。令和 5 年度と比べてではあるが，「時間外学習」と「TOEIC の取り組み」が 20 %程度上昇しており，今後の動向を注視する必要がある。

３．保護者アンケート

保護者アンケートは令和 7 年度から行ったアンケートであり，初期値としての意味合いが強い。アンケートの回答率は 71 %であり，アンケート方法には問題がある状況ではないと考えられる。1，2 年生で

は 80％程度以上で回答率が高いものの，その後，学年を追うごとに回答率が下がる傾向が見て取れ，専攻科では回答が非常に悪くなっていることがわかった。

保護者と学生との間のコミュニケーションは「十分に取れている」,「とれている」が 90％以上と高く，問題ない状況と考えられる。

有明高専の教育活動について「大変満足」,「満足」で 84％であったことから，有明高専の教育活動について,保護者から一定の理解が得られていると考えられる。有明高専の教育活動について「大変満足」,「満足」と解答していただいた方の満足しているパーセンテージは教務関係（授業の内容，カリキュラムなど）であり，学生指導関係（学生への生活指導，部活動など）は 45％と低調であった。

有明高専の教育についての認知度は「養成すべき人材像」の 52 %が最高で,「入学を求める人の素養（アドミッション・ポリシー）」,「教育理念」と続いているが，低調であった。「全て知らない」も 15％であったことから，周知の必要がある状況である。

有明高専の教育についての改善については「全て知らない 又は 改善が必要な項目はない」が 80％であった。「全て知らない」の 15％を考慮すると，65％程度は改善の必要な項目がないと考えられる。

4．既卒業生，既修了生アンケート（OB・OG へのアンケート）

31件の卒業生，4件の修了生からの回答が寄せられた。OB，OGアンケートとも，1割以下の回答率であり，回答方法，回答時期，アナウンス方法など改善が必要な状況である。

【準学士課程卒業生からのアンケート結果】

教育理念の重要度に関する項目では,「1. 幅広い工学基礎」,「3. 創造性に富む技術者」はいずれも80％以上と高いパーセンテージを示している一方で,「5. 学際性に富む技術者」は20 %代と低いパーセンテージであった。「4. 多様性に富む技術者」,「6. 国際性に富む技術者」,「7. （学外との）連携協力」については50％未満であり,「5. 学際性に富む技術者」,「6. 国際性に富む技術者」,「7. （学外との）連携協力」は令和5年度から続けて低調なパーセンテージとなっているため，今後の動向を含めて注視する必要がある。

ディプロマ・ポリシーの重要度に関する項目では,「専門工学に関する高度な知識と創造性に富み，実践力を身につけた技術者」が83%と最も高く,「多様な価値観を理解し，学際的な技術分野で活躍できる技術」,「国際社会で活躍できる広い視野と教養をもつ技術者」は50 %未満であった。「専門工学に関する高度な知識と創造性に富み，実践力を身につけた技術者」を除く4項目が令和5年度に比べると低下しており，今後の動向を注視する必要がある。

ディプロマ・ポリシーを満たすための「学習・教育到達目標」で重要度の高い項目では,「(A-3) コミュニケーション能力」及び「(B-3) 実践力」が77%と最も高く,「(A-2) 倫理観」は54%と最も低く,「(B-4) 学際的知識：様々な分野の知識と技術を理解し，複合的に活用するための視野を持っていること」が57％と続いた。パーセンテージの増減には統一性は見受けられなかったが，最も良いもので80％未満であった。学習・教育到達目標に新たに取り入れることが望ましい事項の有無についてのアンケート結果は,「ある」が20%,「ない」が80%であったことから，学習・教育到達目標を今すぐに見直す必要はないと考えられるが，今後の動向を注視し，動向によっては学習・教育到達目標を見直す必要があるかもしれない。

「準学士課程」卒業時における，準学士課程での各種教育に対する到達度は「十分に身に付いていた」と「身に付いていた」を合わせた割合が，一般教育（文系）では49 %，一般教育（理系）では74 %，専門教育（学力）では72 %，専門教育（資質・能力）では80 %となり，令和3年度，令和5年度，令和7年度と下落傾向である。今後の動向を注視する必要がある。また，下落の要因も検討しておく必要があるとも考えられる。

「高専卒業時に学生が特に身につけておかなければならない能力」,「有明高専のカリキュラムで学んだことが現在役に立っているか」，では，多くの項目で増減に統一性がないことから，今後の動向を注視する必要がある。「専門知識の応用力」は3年連続で増加傾向であり，令和7年度で43％であることは報告しておく。

【専攻科課程修了生からのアンケート結果】

教育理念の重要度に関する項目では,「3. 創造性に富む技術者」は100％と高いパーセンテージを示している一方で,「5. 学際性に富む技術者」,「6. 国際性に富む技術者」,「7. （学外との）連携協力」については0 %であった。母数が少ないことを考慮しても，0 %を示した3項目の今後の動向は特に注視する必要がある。

ディプロマ・ポリシーの重要度に関する項目では，3項目で高いパーセンテージを示していた。現状で問題ないと考えられるが，母数が少ないことから，今後の動向を注視する必要がある。

ディプロマ・ポリシーを満たすための「学習・教育到達目標」で重要度の高い項目では，100％は「(C-2) 課題解決力：様々な問題に対処できるデザイン能力を習得すること」のみであり，「(A-3) コミュニケーション能力：日本語及び外国語によるコミュニケーションを適切にできること」が0％となった。母数が少ないことを考慮しても，0％を示した「(A-3) コミュニケーション能力：日本語及び外国語によるコミュニケーションを適切にできること」の今後の動向は特に注視する必要がある。

「専攻科課程」修了時における，専攻科課程での各種教育に対する到達度は「十分に身に付いていた」と「身に付いていた」を合わせた割合の増減に統一性はなかった。母数が少ないことから，今後の動向を注視する必要がある。

「高専修了時に学生が特に身につけておかなければならない能力」では母数が少ないものの，100％の項目はなく，「一般的教養」，「語学力」の項目は0％であった。母数が少ないことを考慮しても，0％を示した「一般的教養」，「語学力」の今後の動向は特に注視する必要がある。

「有明高専のカリキュラムで学んだことが現在役に立っているか」では，前回（2年前）「役に立っている」が低下し，「あまり役に立っていない」が上昇しておおり，注視する必要性を付言していたが，「あまり役に立っていない」の回答は0％の状況であった。 母数が少ないことから，安心する必要はなく，今後の動向は注視する必要がある。

５．企業アンケート（主な就職先へのアンケート）

72件の企業からの回答が寄せられた。その中で，約8割の企業が準学士課程の卒業生生のみを受け入れ，専攻科課程学生を受け入れる企業は約1割，両方を受け入れる企業も約1割であった。この結果は，例年度と同様の傾向で，毎年の準学士課程終了生と専攻科課程修了生の比率をおおよそ反映していると考えられる。

【準学士課程卒業生の入社企業からのアンケート結果】

教育理念の重要度に関する項目では，「1. 幅広い工学基礎」，「2. 豊かな教養」，「3. 創造性に富む技術者」はいずれも70％以上と高いパーセンテージを示している一方で，「5. 学際性に富む技術者」，「6. 国際性に富む技術者」は30％代と低いパーセンテージであった。「5. 学際性に富む技術者」，「6. 国際性に富む技術者」については令和5年度から続けて低いパーセンテージとなっているため，今後の動向を注視する必要がある。

ディプロマ・ポリシーの重要度に関する項目では，「国際社会で活躍できる広い視野と教養をもつ技術者」は最も低いパーセンテージであった。教育理念においても，「6. 国際性に富む技術者」は低いパーセンテージであり，企業の立場からは，国際性の重要性は重要度が高くないことも考えられることから，今後の動向を注視する必要がある

学習・教育到達目標の重要度に関する項目では，「(A-3) コミュニケーション能力」は98％と最も高いパーセンテージであった。一方，「(B-4) 学際的知識」は52％と最も低いパーセンテージであった。令和5年度より同様の傾向にあるため，今後の動向を注視する必要がある。

学習・教育到達目標に加えることが望ましい項目のアンケート結果，「高度なコミュニケーション力」が高いパーセンテージとなっており，重要度でも高かった「コミュニケーション力」のさらなる強化が期待されていることがうかがえる。

入社時の学力，資質・能力に関する評価では，「満足」，「おおむね満足」を合わせたパーセンテージが90％以上となっている。このような傾向が続くことを期待するとともに，今後の動向を注視する必要がある。

数理・データサイエンス・AI(リテラシーレベル)』の教育プログラムに関しては，「満足」，「おおむね満足」を合わせたパーセンテージが74％となっており，一定の評価が得られている。今回のアンケートが初期値であり，「やや不満」のご意見もあったことから今後の動向を注視する必要がある

【専攻科課程修了生の入社企業からのアンケート結果】

教育理念の重要度に関する項目では，「1. 幅広い工学基礎」が100％と最も高いパーセンテージであった。一方，「5. 学際性に富む技術者」，「6. 国際性に富む技術者」，「7. （学外との）連携協力」は令和5年度より大幅にパーセンテージが低下していることから，今後の動向を注視する必要がある。

ディプロマ・ポリシーの重要度に関する項目では，すべての項目が75％を越えており，良好な結果であった。しかし，令和5年度より「工学の基礎知識，工学の専門知識及び高度に融合された学際的知識を有し，実践力に富む高度な技術者」のパーセンテージが大きく低下していることから，今後の動向を注視する必要がある。

学習・教育到達目標の重要度に関する項目では，「(A-1) 多面的考察力：物事を多面的に考察できること」，「(A-3) コミュニケーション能力：日本語及び外国語によるコミュニケーションを適切にできること」，「(C-1) 課題探究力：現状を進展させるための課題の探求・理解が自らできること」が高いパーセンテージだったのに対し

て，「(B-2) 工学の専門知識：工学の専門知識を深く理解できること」，「(B-3) 実践力：実験・実習等を確実に実践できること」，「(B-4) 工学の学際的知識：工学の学際的知識を専門知識に活用できる程度に習得すること」はパーセンテージが低くなっていることから，今後の動向を注視する必要がある。

数理・データサイエンス・AI(リテラシーレベル)』の教育プログラムに関しては，「満足」，「おおむね満足」を合わせたパーセンテージが63 %となっており，一定の評価が得られている。今回のアンケートが初期値であり，今後の動向を注視する必要がある

6．大学・大学院アンケート（主な進学先へのアンケート）

10件の回答が寄せられた。その中で，8件が3年次編入学，2件が大学院入学であった。回答率が低下しており，対策を講じる必要があると考えられる。

【準学士課程卒業生の4年次編入学生からのアンケート結果】

教育理念の重要度に関する項目では，「1. 幅広い工学基礎」，「2. 豊かな教養」が100 %と最も高いパーセンテージであった。一方，「7. （学外との）連携協力」は63 %と最も低いパーセンテージとなっており，今後の動向を注視する必要がある。

ディプロマ・ポリシーの重要度に関する項目では，すべての項目で75 %以上の高いパーセンテージであったものの，令和5年度より「多様な価値観を理解し，学際的な技術分野で活躍できる技術者」，「国際社会で活躍できる広い視野と教養をもつ技術者」については，ややパーセンテージの低下があるため，今後の動向を注視する必要がある

学習・教育到達目標の重要度に関する項目では，すべての項目で75 %以上の高いパーセンテージとなっているが，令和5年度より「(C-1)課題探究力:自ら課題を発見し,その本質を理解できること」以外の項目のパーセンテージは低下しているため，今後の動向を注視する必要がある。

学習・教育到達目標に加えることが望ましい項目のアンケートの結果，最も高いパーセンテージが「高度なものづくり(設計・製造)技術」の50 %であり，その他の項目についてはあまりパーセンテージが高くないため，今後の動向を注視する必要がある。

編入学時の学力，資質・能力に関する評価では，「満足」，「おおむね満足」を合わせたパーセンテージが75 %となっている。今後の動向を注視する必要がある。

数理・データサイエンス・AI(リテラシーレベル)』の教育プログラムに関しては，「満足」，「おおむね満足」を合わせたパーセンテージが63 %であった。「やや不満」が13 %あることから今後の動向を注視する必要がある。

【専攻科課程修了生の大学院からのアンケート結果】

教育理念の重要度に関する項目では，「1. 幅広い工学基礎」，「3. 創造性に富む技術者」が100 %で，最も高いパーセンテージであった。一方，「4. 多様性に富む技術者」，「5. 学際性に富む技術者」，「6. 国際性に富む技術者」，「7. （学外との）連携協力」は0 %であり，母数が少ないことを考慮しても今後の動向を注視する必要がある。

ディプロマ・ポリシーの重要度に関する項目では，「工学の基礎知識，工学の専門知識及び高度に融合された学際的知識を有し，実践力に富む高度な技術者」，「課題の探求能力に優れ，またその課題を解決する方法を提案できる高度な技術者」で100 %と高いパーセンテージであった。母数が少ないことから，「物事を多面的に考察できる力，社会における技術者の責任を自覚できる高い倫理観，及び優れたコミュニケーション能力を備えた高度な技術者」を含めて今後の動向を注視する必要がある

学習・教育到達目標の重要度に関する項目では，「(A-1)多面的考察力：物事を多面的に考察できること」，「(A-3)コミュニケーション能力：日本語及び外国語によるコミュニケーションを適切にできること」，「(B-4)工学の学際的知識：工学の学際的知識を専門知識に活用できる程度に習得すること」，「(C-1)課題探究力：現状を進展させるための課題の探求・理解が自らできること」が100 %となっていないことから，今後の動向を注視する必要がある。

学習・教育到達目標に加えることが望ましい項目のアンケート結果，母数が少なく，年度ごとに回答の傾向が大きく異なっており，今後の動向を注視する必要がある。

大学院入学した学生の学力，資質・能力に大きな問題はない回答と考えられるが，母数が少ないこともあり，今後の動向を注視する必要がある。

数理・データサイエンス・AI(リテラシーレベル)』の教育プログラムに関しては，大きな問題はない回答と考えられるが，母数が少ないこともあり，今後の動向を注視する必要がある。

7．令和 8 年度，準学士課程入学生アンケート

令和 8 年 4 月の新入生アンケートでは，例年と大きく変動する項目はなかった。本アンケート結果は

学生課教務係と連携しており，令和 9 年度以降の入学希望者へ展開され，広報活動等に活かされることを強く望む。「『高専』という選択」「キラキラ高専ガールになろう！」はほとんど読まれておらず，昨年度も対応が必要と指摘しましたが，このことに関する動きを感じ取ることができない状況は残念であった。

８．令和 8 年度，準学士課程 4 年次編入学学生アンケート

令和 7 年度に編入学生がいなかったため，令和 5 年度，令和 6 年度との比較が基本となる。令和 8 年 4 月の 4 年次編入学生アンケートでは，編入学生が 4 名でした。受験に関する時期はばらつきが多く，今後の動向を注視していく必要がある。「編入学の動機」，「本校の魅力」などは 3 年間定番の回答（「自分の学びたいことが学べる」や「就職実績が良い」）がある一方，年度により変わる項目もあり，定番の回答は令和 7 年度以降の入学希望者へ展開され，広報活動等に活かされ，入学希望につながっていくことを強く望む。

アドミッション・ポリシーの内容の認知に関しては 100 %になり，満足度のパーセンテージも高止まりであることから，入試広報，教務主事室等での現状が維持されるような対応が望まれる。

９．令和 8 年度，専攻科課程入学生アンケート

過去 2 年間のデータと比較すると，有明高専の専攻科の認知時期が高専入学後となったこと，入学の動機が「大学院の進学実績が良い」が大幅にパーセンテージを下げたことを除いて類似しており，今後の動向を注視する必要がある。今後の専攻科課程入学の参考になれば幸いである。

アドミッション・ポリシーに関する項目では，アドミッション・ポリシーの認知度が 100 %でない状況であった。100 %になるよう，入試広報，専攻科委員会等での対応が期待される。また，アドミッション・ポリシーの各項目の自己評価満足度では全項目で 70%を切っており，「国際社会で活躍できる広い視野と教養を備えた人」は 30 %台であることから，改善が必要と考えられる。

本調査報告書は，令和 7 年度の卒業生・修了生，保護者，既卒業生・既修了生，主な就職先・進学先，令和 8 年度の入学生（準学士課程 1 年生，4 年次編入学生，専攻科課程 1 年生）に対するアンケート報告書であり，卒業生・修了生の意識や質保証，次年度の入学者選抜といったスピーディな対応が望まれるものを運営会議に報告するとともに広く一般に公開するものです。昨年度の報告書でも申し上げましたが，本校の関連部署等が改善の意識をもって積極的に「本調査報告書」に目を通していただき，本校の教育システム・プログラムの継続的改善・向上の一助として活用していただくことを切に望みます。本調査報告書において，わかりにくい表現等ありましたら本委員会にお知らせください。また，活用できる質問項目を積極的にお教えいただきますようよろしくお願いいたします。

最後に，各種アンケート調査にご協力・ご尽力，ならびにご支援頂きました関係各位・各組織に深く感謝の意を表します。

自己点検・評価委員会
委員長　　田中 康徳（創造工学科）
清水 暁生・小林 正幸・岩本 達也・石川 洋平・窪田 真樹（創造工学科）・酒井 健（一般教育科）
事務担当　　山口 智子（総務企画係）